

烧津市南部地区民俗誌

木三十八

烧津市南部土地区画整理組合

烧津市南部地区民俗誌

千八木

烧津市南部土地地区画整理組合

ヤシヤンボー

焼津市南部地区民俗誌

はじめに

私たちの住んでいる焼津南部地区は、大井川の形成した平野の中の先端部にあたり、永く水田稲作を主とした生活を営んできた歴史があります。その歴史の中には、先人たちが一畝一畝起こして築いた田畑を、洪水で一夜にして失ったことも度々あります。また地震の津波で家屋敷ともに多くの人の命を奪われたこともあります。残念ながら今は枯れてない「鳴子の松」は、その津波に追われ必死に枝にしがみついた人々の様子が、まるで鳥追いの道具「鳴子」のようだったということから付けられた名前だそうです。

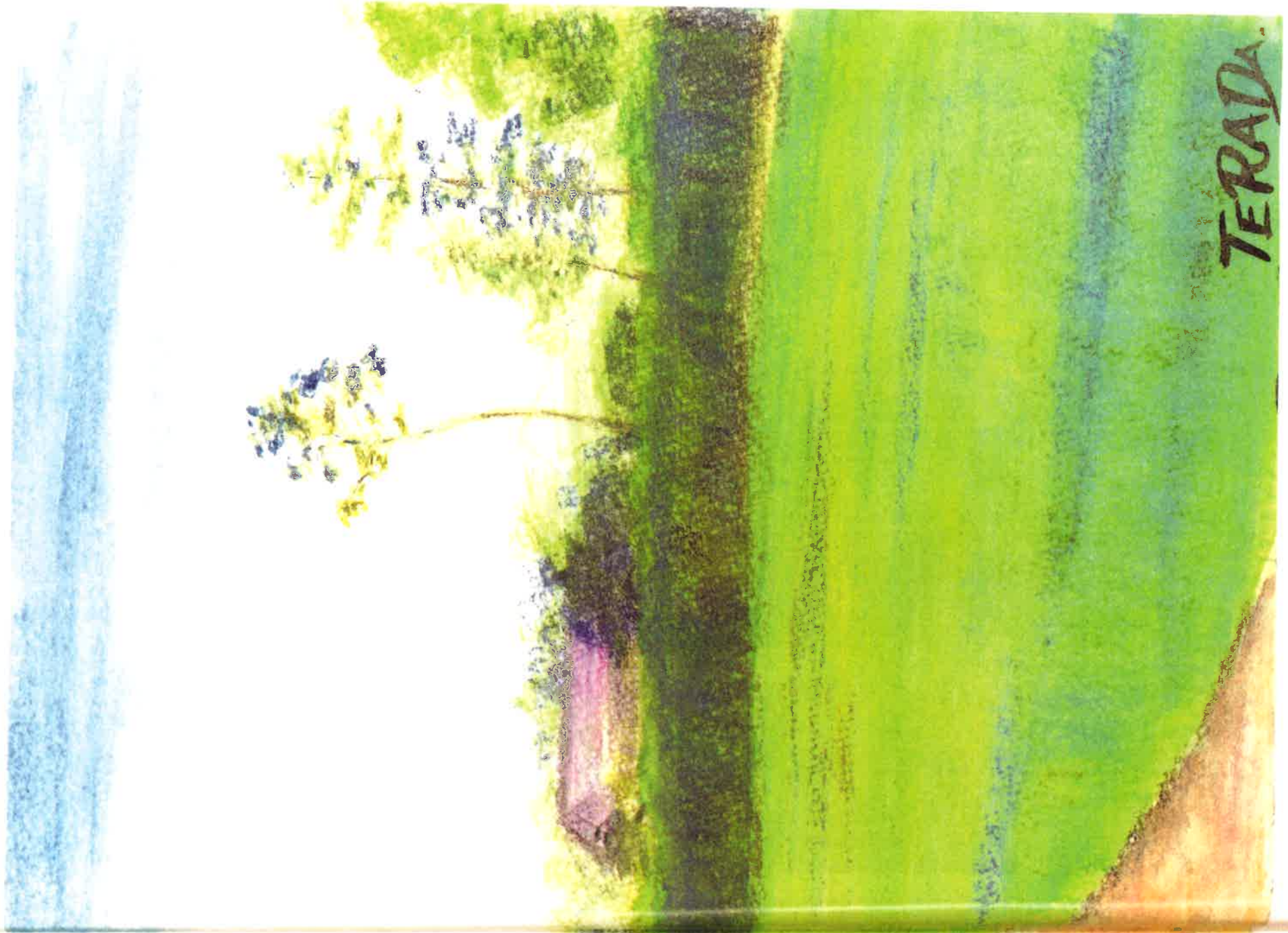
純農業地域の村々も、昭和四十年代から宅地化が進み、楨囲いの家と新建材の家が並ぶようになりました。それに伴い自動車時代がやってきて、耕地整理の折に造成された道が現代の生活にそぐわないものになっています。そんな中で今、自動車時代に即した土地区画整理事業が進行しています。また新たな時代を迎えようとしているわけですが。しかしそれは、ヤシャンボ一の並木道、楨の木に囲まれた屋敷、棚井に泳ぐ鯉など故郷の懐かしい風景が消え去っていくことでもあります。私たちは変化して行く風景と共に、その中で先人たちが語り伝えてきた思いを忘れてはなりません。私たちはそんな故郷への思いを記録しようと、この焼津南部地区民俗誌「ヤシャンボ一」を編みました。この本がやがて後の人々に何らか役にたつであろうことを心より願っています。

平成五年三月

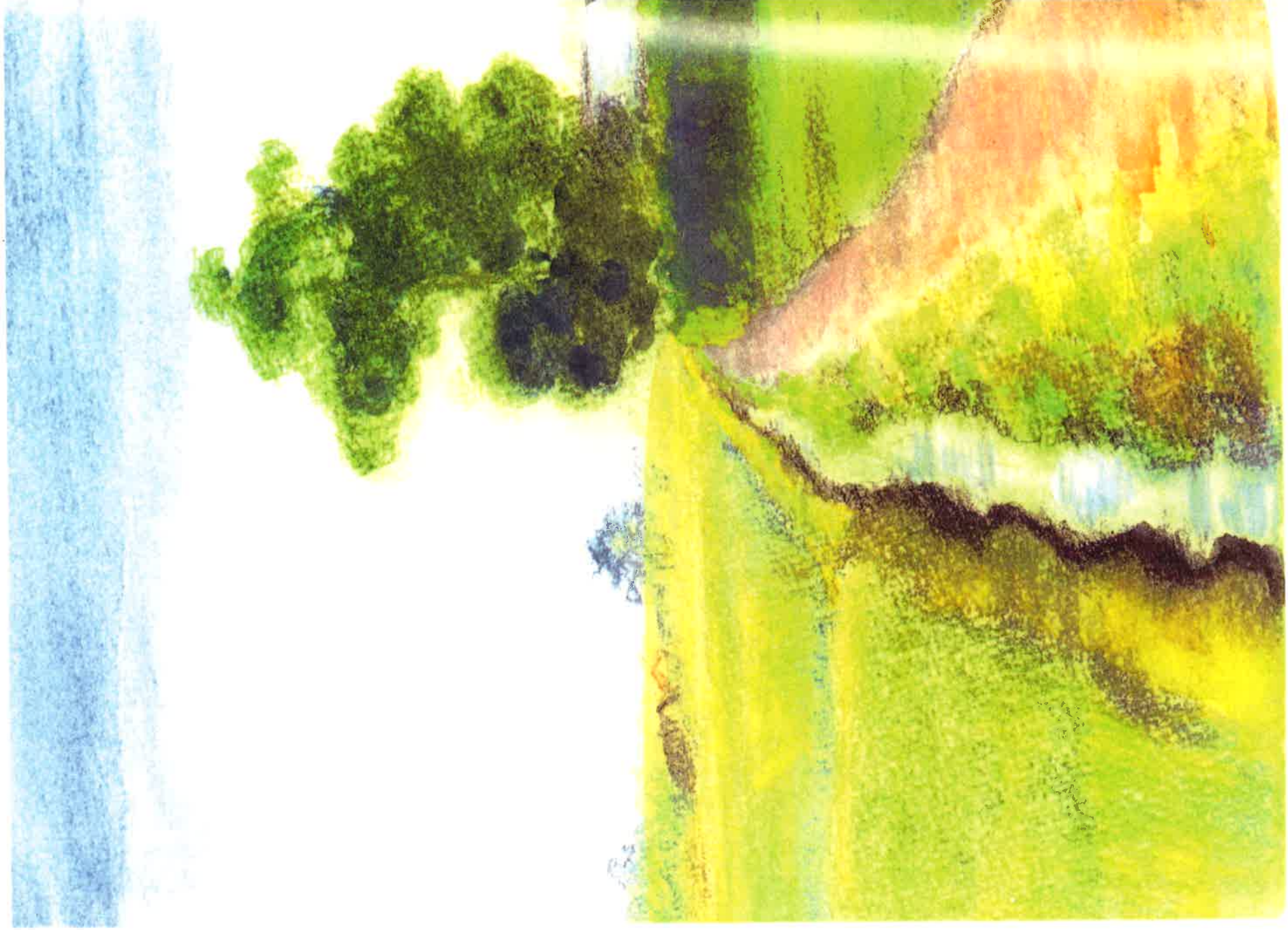
焼津市南部土地区画整理組合理事長

瀧井 勇





TERADA.



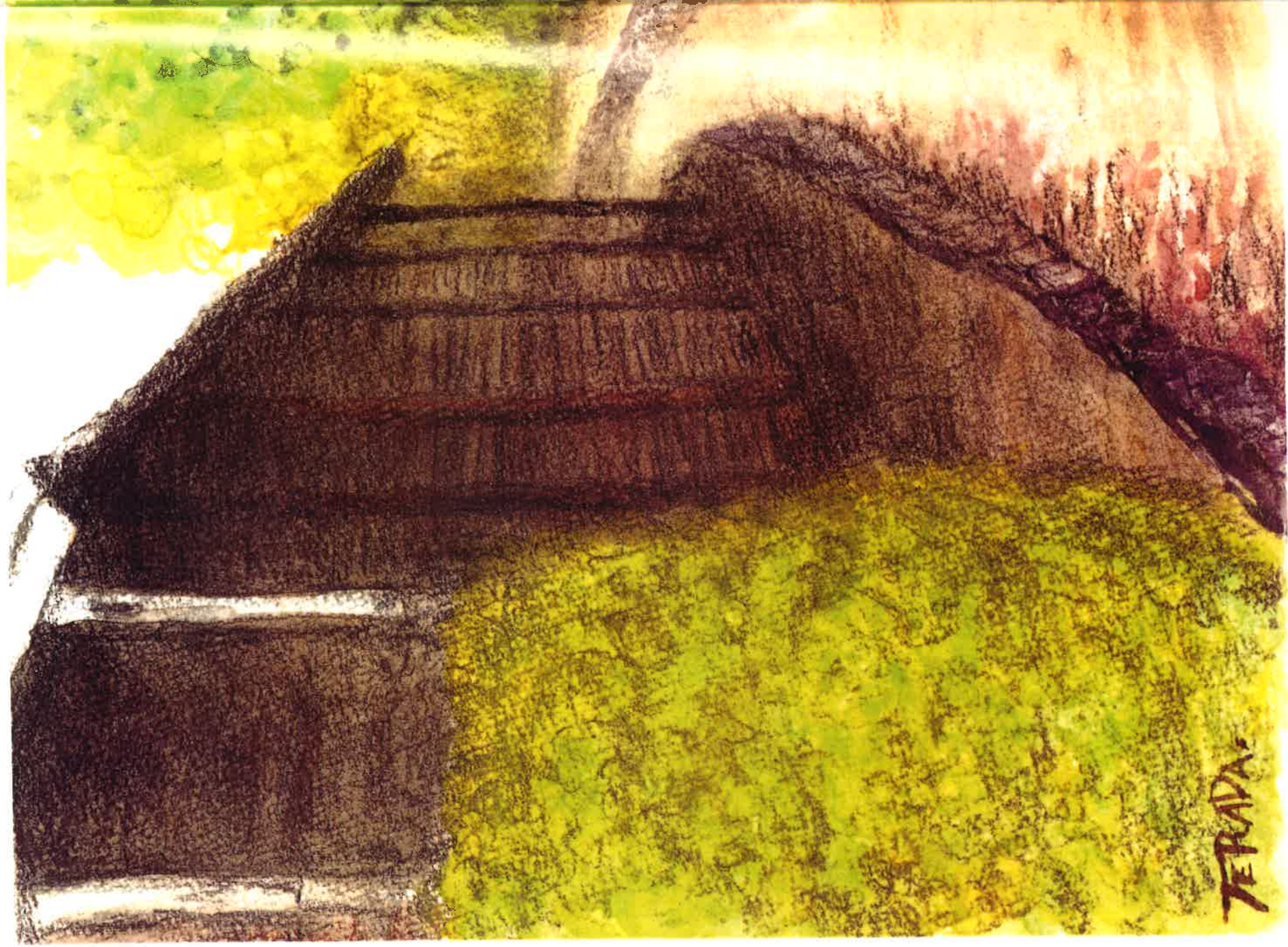


TERADA

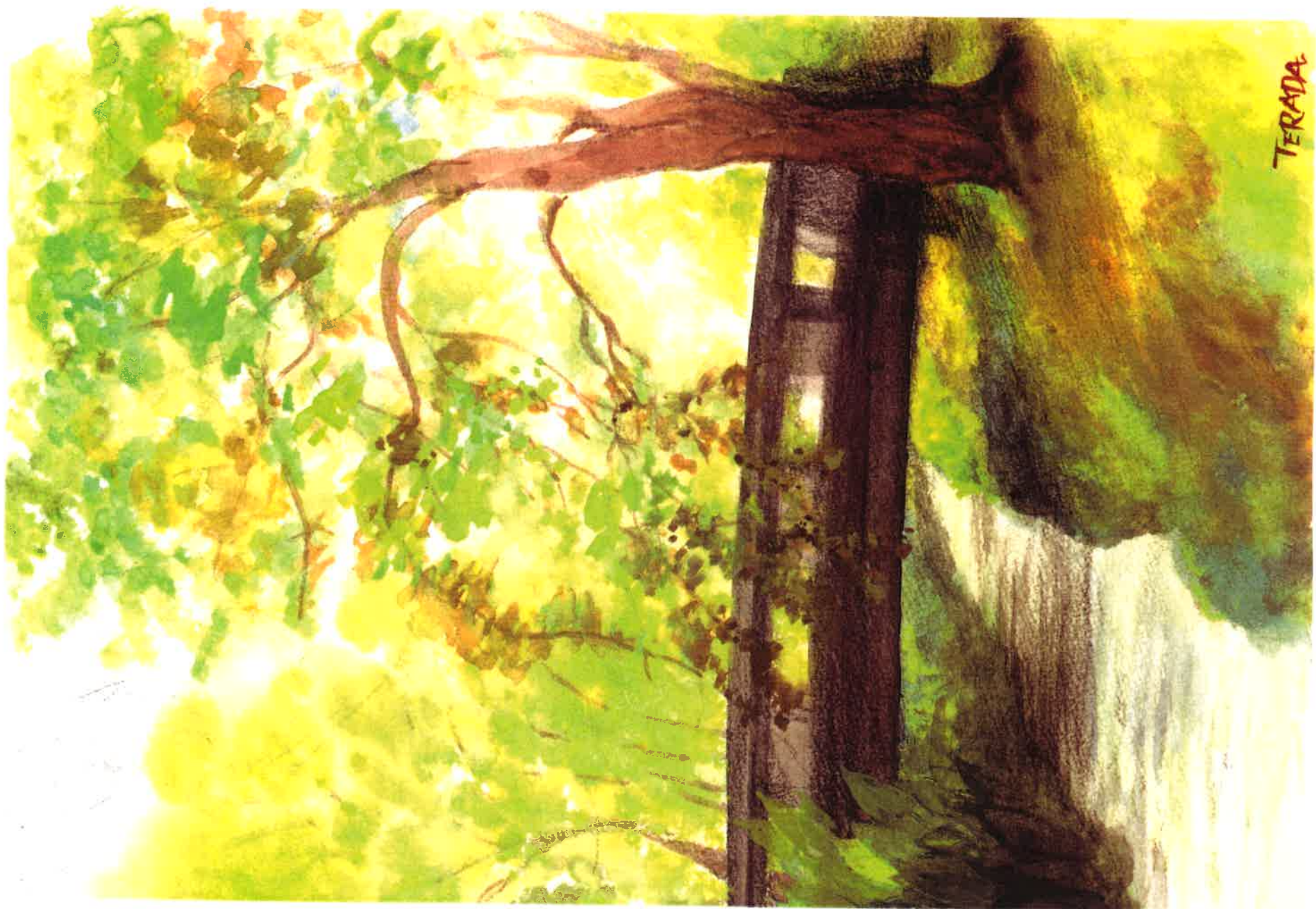
100 x 150







TERRADA



TERADA



目次

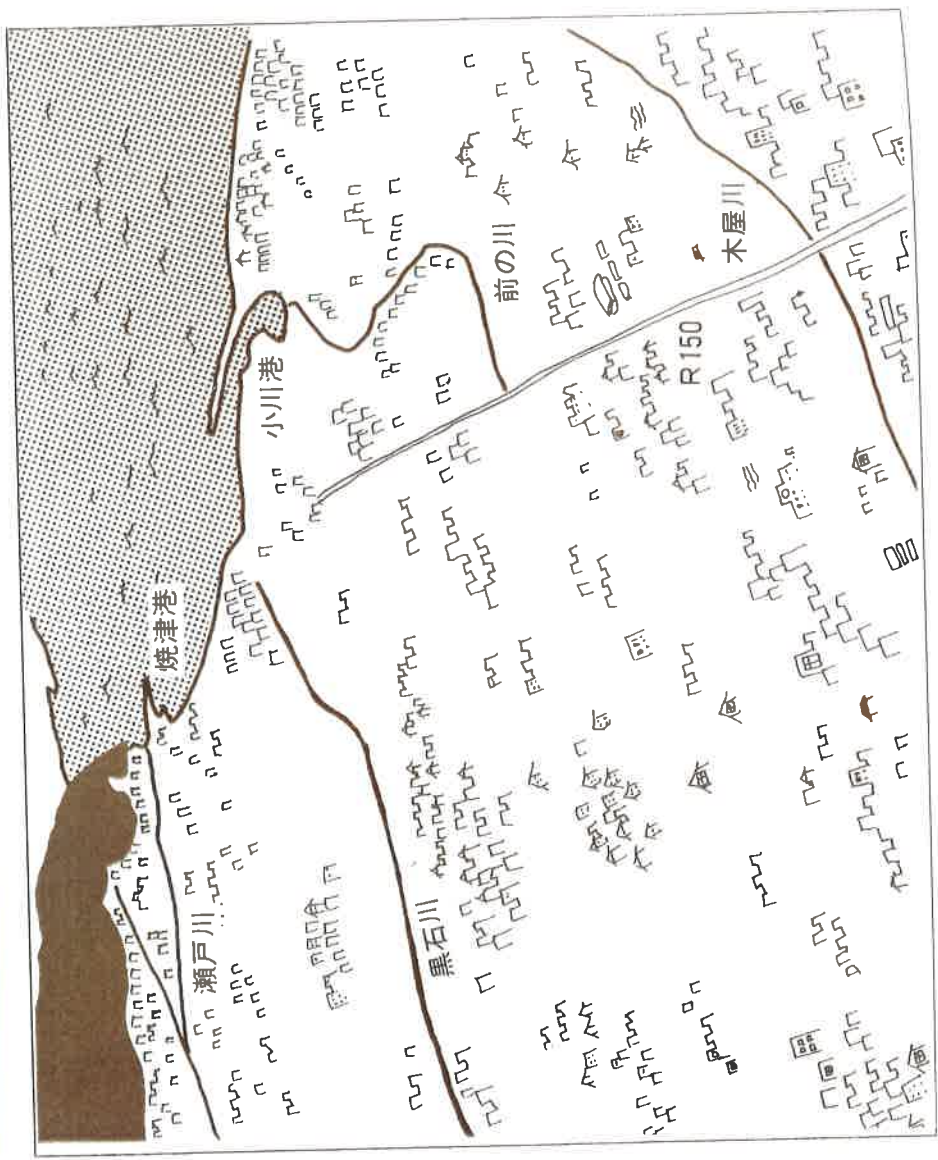
口絵
はじめに

第一章	景観からのメッセージ	一九
一	水路とヤシヤンポーと横囲い (八木)	二一
3 1	黒石川からの用水と大井川が混成する水路網 (伊久美)	二二
3 2	風向きと生垣・又玄関口の方向	二六
3 3	屋敷森の特徴	三〇
二	大井川平野のボタ (中村)	四五
1	ボタの分類	四四
①	防災型のボタについて	四七
②	生業型のボタについて	四八
③	埋葬型のボタについて	五二
④	信仰型のボタについて	五三
2	ボタとはやり墓・はやり神	五五
①	信仰型ボタからはやり墓・はやり神へ	五八
②	なぜ信仰型ボタがこの地域に多いのか	六一
3	ボタに寄せられた思いを後世へ	六二
第二章	ムラの内と外 (八木)	六五
一	世間の境界	六六
二	心意の中の内と外	七五
三	南部地区とその周辺の祭り	七六

第三章	焼津南部地域の民話	(中村)	八七
	1 民話の分類		八八
	2 1 災害		九九
	2 2 災害		九九
	3 3 奇り		九九
	4 4 奇り		九九
	5 5 旅人の死		九九
	6 6 信仰と奇跡	はやり神	九九
	7 7 崇りと信仰		一〇四
	8 8 わが家の誇り		一〇四
	9 9 動物		一〇六
	10 動物		一一二
第四章	戦国時代の小川と長谷川氏		
	1 法永長者考	(前田)	一一九
	1 戦国時代の小川とその周辺		一三〇
	2 1 小川湊		一三〇
	2 2 明応の大津波		一三二
	3 水軍伊丹氏		一三五
	1 小川の長谷川一族		一三六
	2 1 小川の住人		一三六
	2 2 小川の長谷川氏		一三七
	3 田中城主長谷川氏		一四五
	4 その後の長谷川氏		一七七
第五章	湿原の暮らし		一五三
	1 湿原の農業	(八木)	一五四

二	年中行事と食	(中村)	一七三
三	川漁	(八木)	一八八
3 2 1	水口の川漁		一八八
	水路小川の川漁		一九一
	黒石川や木屋川の川漁		一九一

口 絵 寺田一
 グラビア写真 八木洋行



第一章 景観からのメッセージ



ヤシヤンポーと水路

水路とヤシヤンボ―と槇囲い

田んぼの中をゆるやかに曲がる道、その道のすぐ脇を流れる小川、のぞけばメダカ
の群れが驚いて下手へ泳ぎ去るが、すぐ止まり群れの体形を整えて上手へ踵をかえす。
透き通った流れの底には、シジミがいっぱいいる。朝のみそ汁の具に、ザルでひと掻
きすればそれで十分必要な量が採れた。

流れを屋敷の中の棚井へ引き込んでいる。棚井では洗い物をした。食器、野菜、洗
濯物のゆすぎ洗い、それから鯉や鯛も洗った。朝、出がけにここで鎌を研ぐことも
あった。苗代を造る前、モミを取り出してきて、モミ俵をこの棚井に漬けて発芽を促
したりもした。コイも飼った。棚井の辺りにはシヨウブを植えた。五月の節句にはこ
のシヨウブの葉でシヨウブ湯をやった。コイはマゴイとヒゴイを飼った。マゴイは
時々食卓に登った。棚井から逃げ出したヒゴイが小川を泳ぎ、子どもたちが見つけ騒
いだりもした。棚井の水はやがてまた小川の流れにもどって行く。

小川は時に、ヤシヤンボ―の並木の木もれ日が連続する中を流れる。ヤシヤンボ―
は高さ三皿程に刈り込まれ、冬枯れする時などは団子になったボ―ズ頭を並べる。ヤ
シヤンボ―の木枝は重要な燃し木になったので、二年に一度木枝が伐られ、いつまで
も背丈を伸ばせないヤシヤンボ―が並んだ。ヤシヤンボ―はただヤシヤと呼ばれるが、
正式の名はハンノキという。ハンノキを田の畦道に植えはじめたには江戸時代の中頃
というが、伊豆七島や伊豆半島などでは、この成長の早い木を植樹して七年〜一〇年
のサイクルで焼畑をおこなっていた。伊豆や安倍奥のワサビ畑では日影を作るために
ハンノキを植えている。志太平野では燃し木の不足を補うためと、秋の収穫期に稲を
干すハンデの柱木にこのヤシヤンボ―の並木を使った。湿田が多かったためまことに
このヤシヤンボ―はハザ掛けに都合がよかった。横木は主に真竹を用いた。一さお二
間半、ヤシヤンボ―は二間ずつの間隔で植えられていた。真竹は屋敷森の一部に防風
と水防を兼ねて植えられており、三年以上のもを何本か毎年彼岸すぎに伐りだして



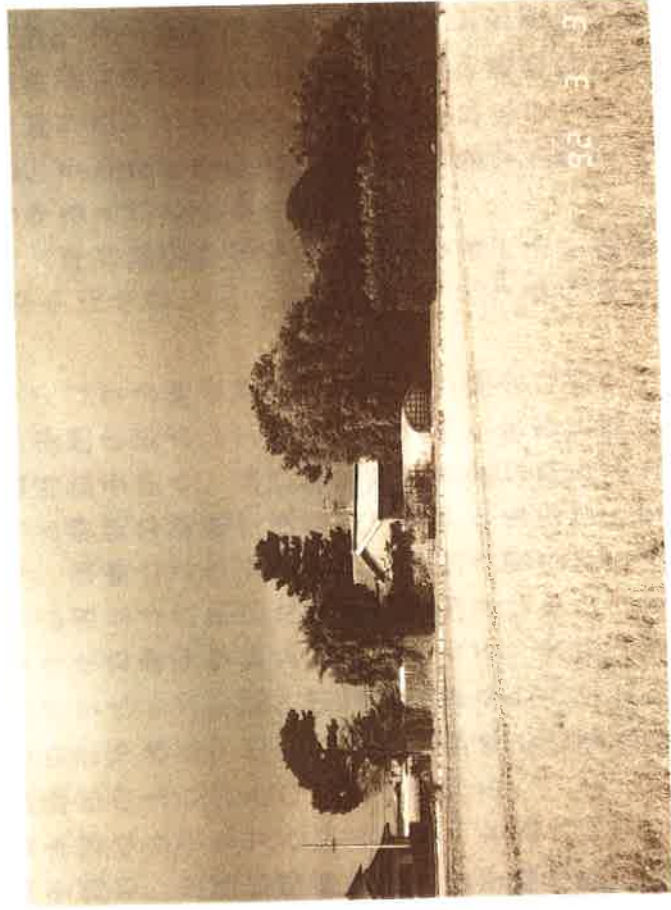
前の川

石津新田付近にはヤシヤンボ―がわ
ずかに残されている

使った。

屋敷森の構成はまず、楨囲いがおおきな特色で、防風にこの常緑樹はすぐれている。北と西を高く、南と東はやや低く仕立てるのも工夫である。楨囲いのすぐ内側にクロ松が間隔を置いて背をのぼしている。クロ松の落葉は思ったより大量に出る。これは燃し付けに利用した。井戸端にはヤマモモの木を植えた。ヤマモモの木は水を呼ぶ樹木と言われているからだ。南側を家の門口とした。門口の左にはカシワの木を植えた。五月のカシワ節句にはこの葉が必要だった。カシワの葉は冬枯れしても木枝についたまま冬を越し、芽が芽吹くとやっとその葉を落とした。その生命力にあやかろうとカシワの葉で餅を包むのだと言われている。その東側にはダイダイが一本は必ず植えられた。正月のお飾りに欠かせない。また、実をしぼって酢の代わりにもしたのだ。シユロを一・二本植えてシユロ皮から縄をなつた。水気に強い縄ができた。楨囲いの中にクチナシの木を植え、その実で三月の節句の餅を染めた。田植え飯をクチナシで染めるところもあった。足腰の疲れ取りのために、クチナシはよく効くからといわれていたからだった。

ところで、こうした屋敷森をもつ家も今では新しい住宅に囲まれており、農村からマチへ移行しつつある。とりわけ昭和四〇年代から急速に住宅化が進行し焼津南部地区の歴史民俗的景観は急速に失われてしまったが、その楨囲いの屋敷だけをもってかつての農村をイメージすると、その楨囲いの屋敷が各集落ごとに固まっているのが一つの特色であることに気づく。関西型農村集落のように、広場と寺院などを集落の中心に置いて家が固まって建っている「集合型集落」と、関東型農村集落の特色である屋敷森の発達した「分散型集落」の中間をいくようなタイプの集落が展開したことになる。そのおおのの集落の発展は、本家を水路の上手に、分家はその下手にというのが一つの原則としてあるらしい。それは一本の水路によってネットワークされる一族集団ということでもある。その典型が石津新田でA、B、Cの水路に沿って、それぞれの一族が屋敷を並べている。これには、微高地に屋敷地を求めたことが、まずその第一の背景であった。そして微高地を避けて流れる枝川をそのまま生活用水に利用



森敷屋とい囲楨

た開拓史が浮かび上がる。また、本家の葬地が屋敷の上手（水の流れの上流に当たる位置）にあり、葬地の杜がその一族を守るといふ民俗信仰があつたためとも考えられる。水路は洪水時には本流の水をよび屋敷地を脅かすことも度々であつた。そのため屋敷地の上手と水路の接点に葬地を設け、先祖の御魂をもって子孫の暮らす屋敷地を守らんとしたのである。ここには本家から分家するにあたり、本家の下手に屋敷地を求め先祖の御魂に守られんとした原則のようなものが読み取れる。

微高地の中にはボタと呼ばれる場所がある。田んぼの耕作地から出る石を何年も拾い集めて寄せた石捨て場がその大半であつた。が、中には牛馬をうめたボタ、流れ仏の葬地、焼き場などの決してハレやかな場所ではないボタもある。大井川あるいは黒石川、木屋川など旧大井川流路から独立した河川が洪水で形成したボタもあつた。そこには洪水で流された仏ばかりか、動物たちの死体も時には流れ寄ることもあつた。そうした時、人々はそのボタをある特別な感情で祀り、タタリのあることを恐れたものであつた。丁寧に祀ることで御利益を生み、流行神として有名になることもあつた。しかし、ボタの多くは畑地として生産の場として利用されたのである。桑を植えて養蚕の支えとしたり、お茶を植えて少しでも現金収入につながる換金作物をこころがけたりもした。

今ではもう湿田という水が一年中引かない田んぼをイメージするのはむずかしくなつたが、土地改良までは水田の大半は裏作のできない湿田であつた。湿田と湧水地を利用して金魚、鯉などの養魚をやる人たちもあつた。

水田地帯としてくぐれながらも、その水田そのものは実に多様な土質を見せ、砂礫層大半という土地もあつた。「日焼け島」と呼ぶ小字は作土がほんの十五〜二十センチ程と、夏には水田が湯になる程高温化するのど稲の根は腐り、秋になって稔りはじめる前に枯れ始める有り様であつた。こんな田んぼを「秋落ち」と呼び、作土の下の砂礫層をつるはしで起こし、志太梨を作つた時代もあつた。砂の多い場所ではサトイモを作ることで現金収入化を計り、生計を立てた所もあつた。

昭和四十年代以後、燃料革命でヤシャンボリの木枝を燃し木とし利用することもな

なくなった。耕地整理で曲がった道、曲がった畦は直線化され、あのヤシヤンボ一の並木も消え去った。治水工事で川の淵も無くなり、淵で泳ぎ遊ぶ子どもたちの姿ももう決して見ることはなくなった。この平野に暮らす人たちが、身近な暮らしの中で見てきた自然風物詩、ホタルの乱舞、メダカの群れ、シジミ貝の群れなどは、もうとっくに姿を消してしまっている。そして今、本当に人の暮らしの真の豊かさを再考する時代にきている。

1 黒石川からの用水と大井川が混成する水路網

左ページの図は石津新田の水路と家屋敷の関係を示したものである。

A水路は吉田一族

B水路は石田一族

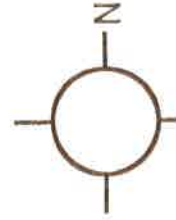
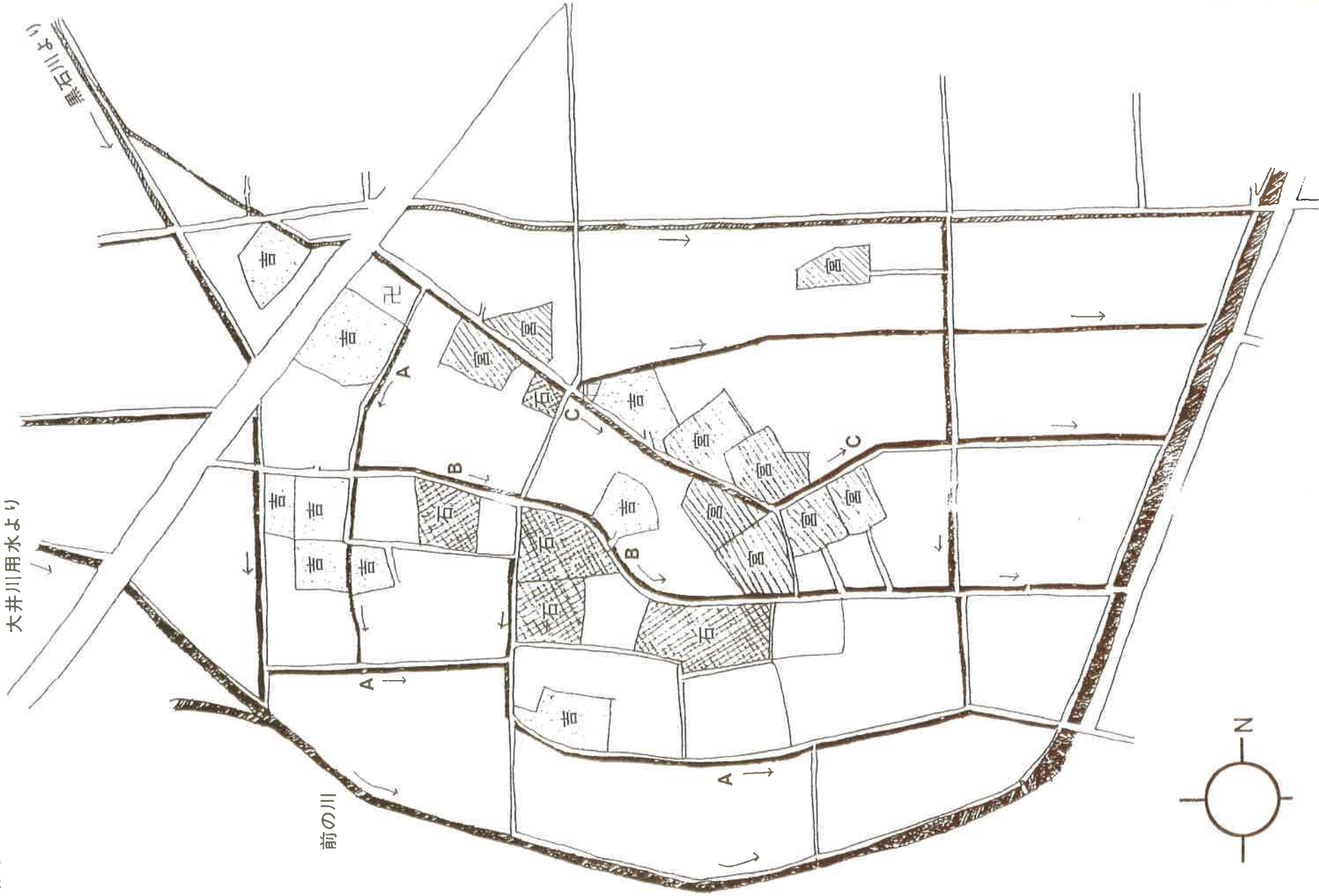
C水路は宮島一族

といった具合に、水路に沿って同族集団の屋敷図が展開する。

平成2～3年の調査実施期間でかつての水路と屋敷の関係をほぼ普通りにとどめる地域は石津新田が最も適地であった。

黒石川からの用水と大井川が混成する水路網

大井川用水より



2 風向きと生垣・又玄関口の方向

左ページの図は石津新田の家敷とその生垣・玄関口の方向を示す。

西風は1月末～3月初めまで季節風として一定方向に吹くため、横囲いの高さは2.5～3m程の高さが平均的である。

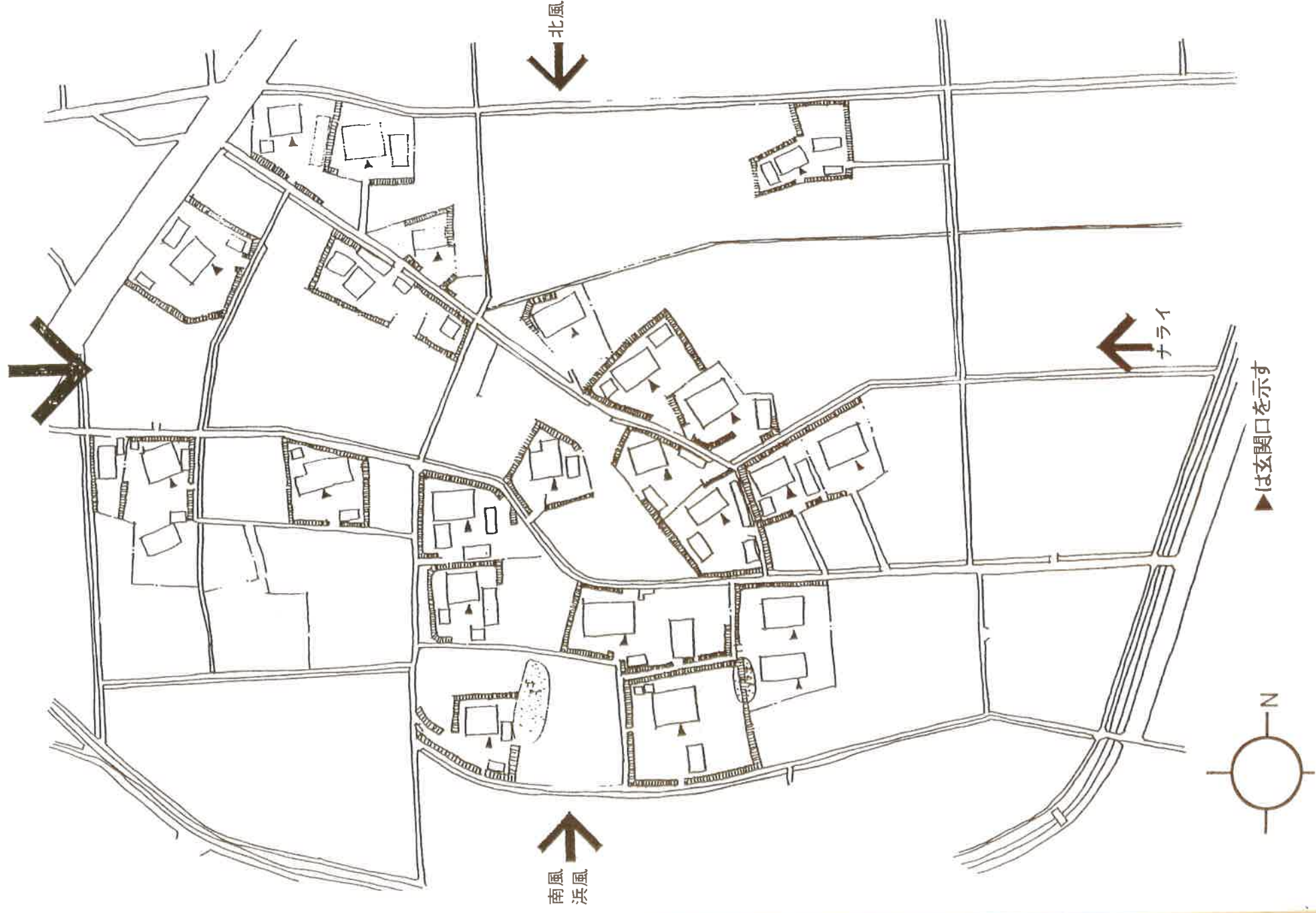
→印は風景と風向きと総体を示す。

南の方向にはほぼ玄関口がつく。南は潮風が吹くため、本当なら生垣の高さを3mは欲しいが、日差しも十分庭へほしいので、2m弱の高さが平均的である。

北側と南側へはシイやマツなどの樹木を横囲いの内側に植えてあるのが一般的である。

ナライと呼ばれる東風は台風の接近時に多く吹き、また天気がくずれる前兆として受け取る。潮風が混じる場合が多い。

風向きと生垣・又玄関口の方角 (石津新田)



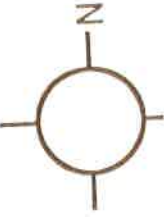
3 屋敷森の特徴

左ページの図は横の生垣の位置を示す。

- ・防風のための横の生垣。
- ・西の風は強いので少し高くしてある。
- ・南の面は低くしたいけど潮が強いのであまり低くはできない。5尺～7尺。
- ・ナライの風はそれ程潮が強くない。
- ・戌亥の方角にはサカキ、巽の方角にはコウバナ。
- ・実のなる木を植えた。カキ、ナツミカン。他にユズリハ、ツバキ、マツ（南の端の家はマツヤシキと呼ばれた）。
- ・大井川の水が来ないように屋敷の周りには土手を作って水害に備えた。
- ・シノタケ（女竹？）を使っている場所もある。
- ・他人が葉をとりに屋敷内へ入って来るから、それを避けるために、クスリになるビワの木は屋敷内には植えない。
- ・玄関は巽の方角
- ・セド（カマヤ）は東側
- ・ナガヤ（脇屋）、タイヒ小屋、牛小屋は南の方角
- ・タバコの乾燥小屋は戌亥の方角
- ・地の神さんも戌亥の方角
- ・ハナレは西側

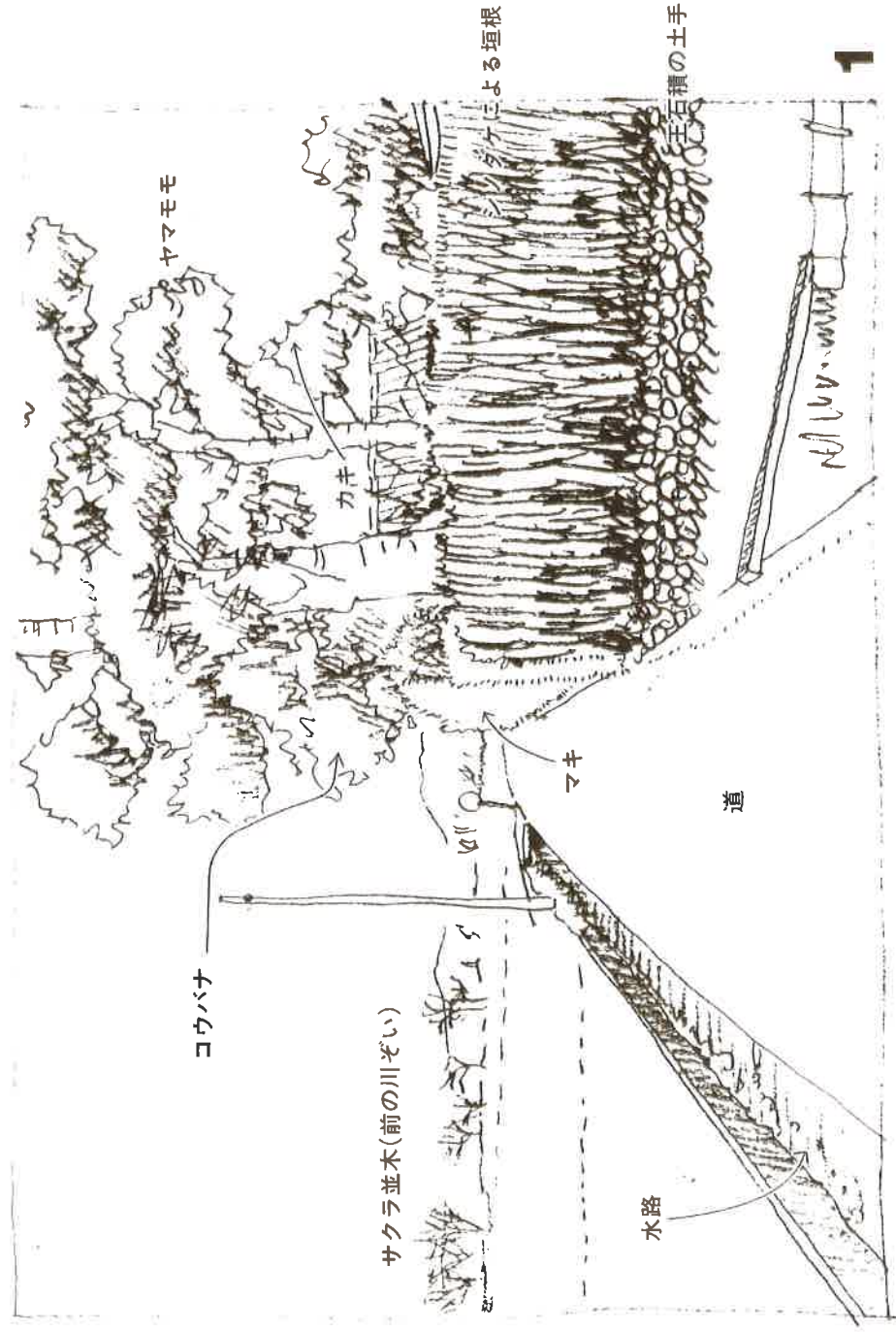
左ページの1～6の数字はP 3 2～P 3 7までの絵図を示す。⇐は、描いた方向を示す。

屋敷森の特徴 (石津新田)



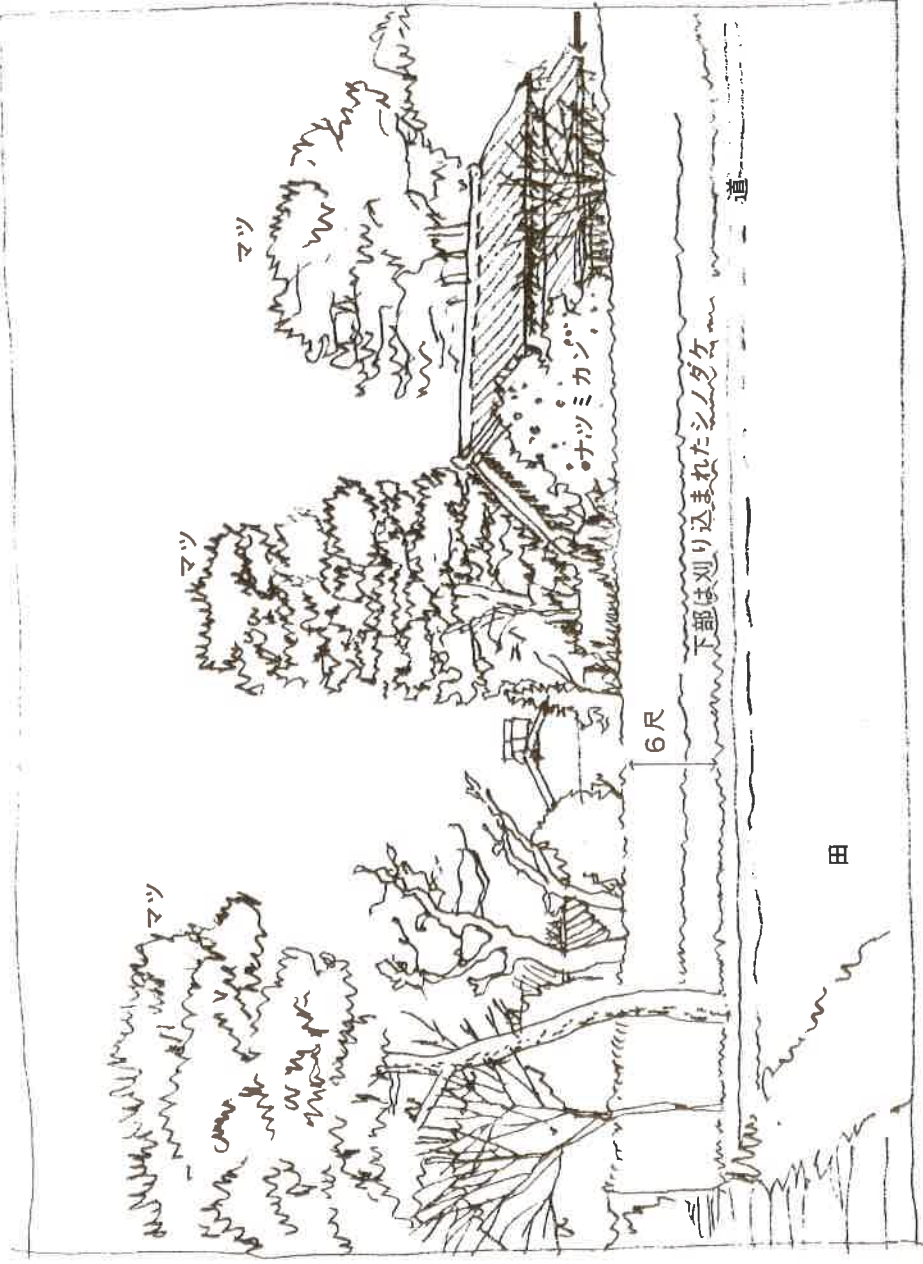
-  庭敷内
-  マチの柱色
-  谷屋

- ◎ マチの柱色は西向きと北側の
の方が比較的高い。
- ◎ 庭敷の入口は里手方向が多い。



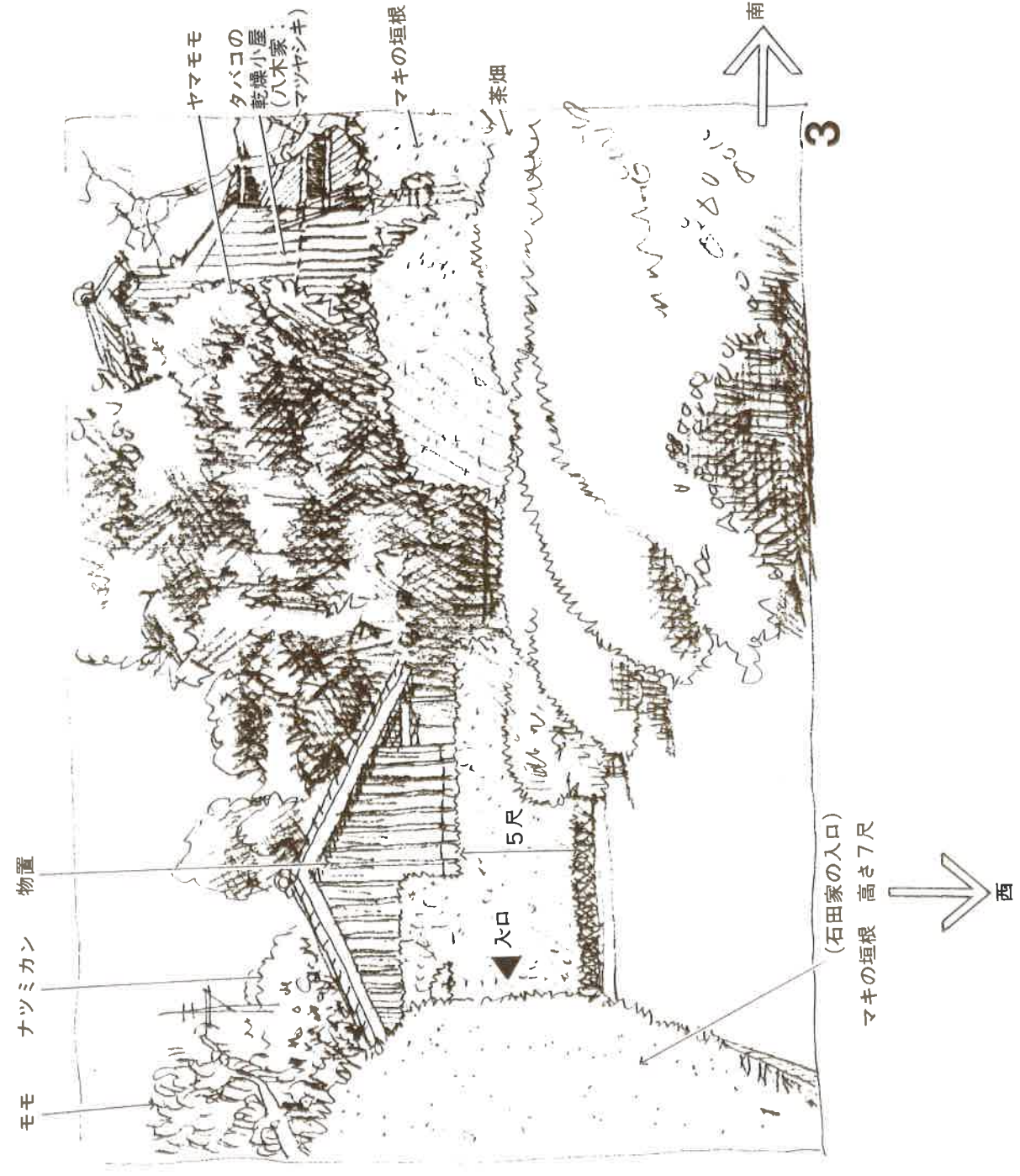
南に位置するマツヤシキと呼ばれた家

- ・ 東側はシノダケ（女竹）による生垣、他はきれいに刈り込まれたマキ
- ・ 隅には大きなヤマモモの木
- ・ 四周に土手が巡らしてあった
- ・ 道の幅は6尺～7尺程度



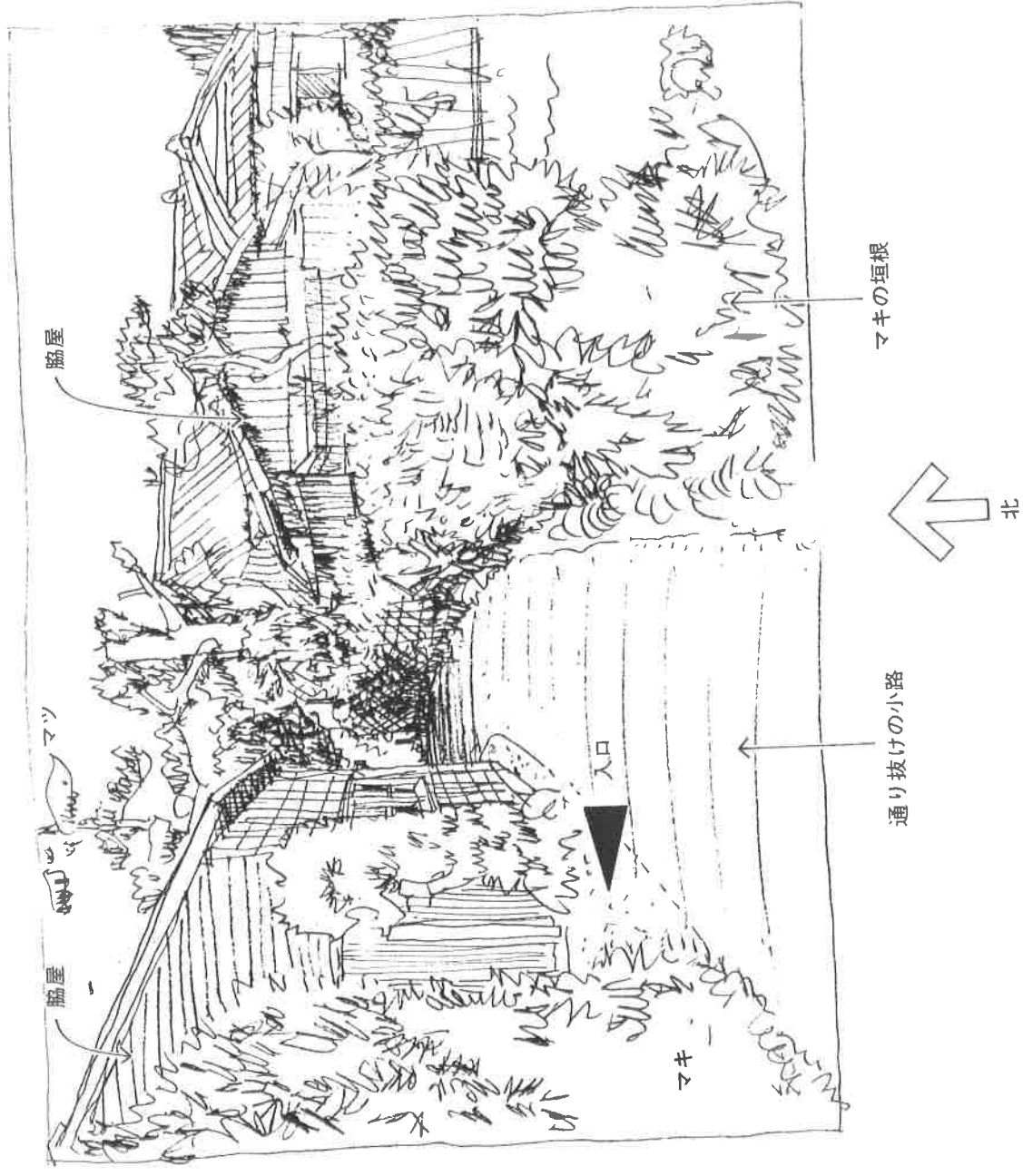
南西の方に位置する家

- ・刈り込まれたマキとシノダケの生垣
- ・大きな松の木、ナツミカダン
- ・西、北には風除けのための大きな木を植える
- ・家はだいたい南東に少し振って向いている



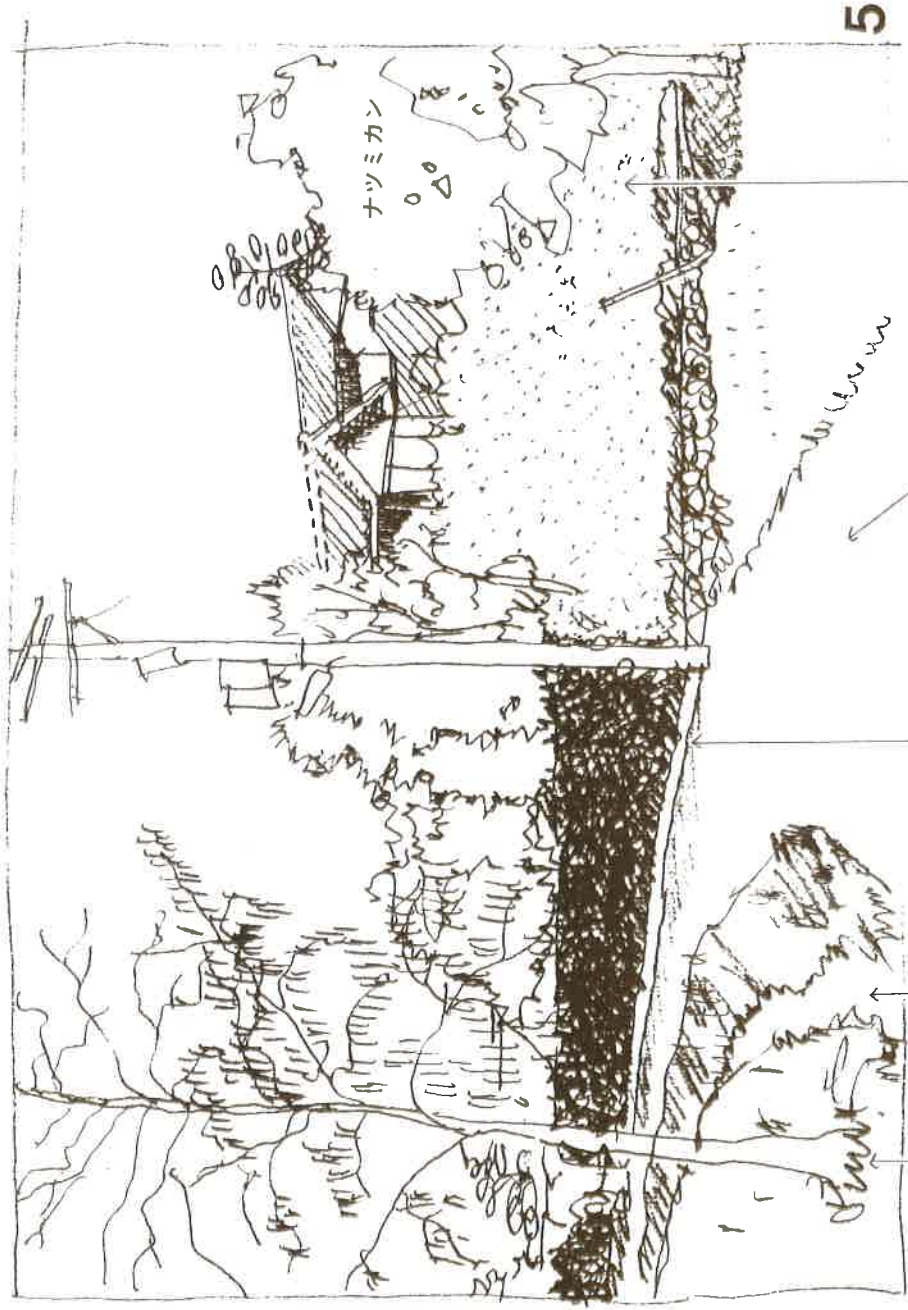
風殺しの入口とマキ囲い

南面のひなた地は現金収入になる茶が植えられている



両側の家とも宮島家

水路に沿った道のカーブがこの集落の全体をデザインしている



ヤシヤンポー
(残存する)

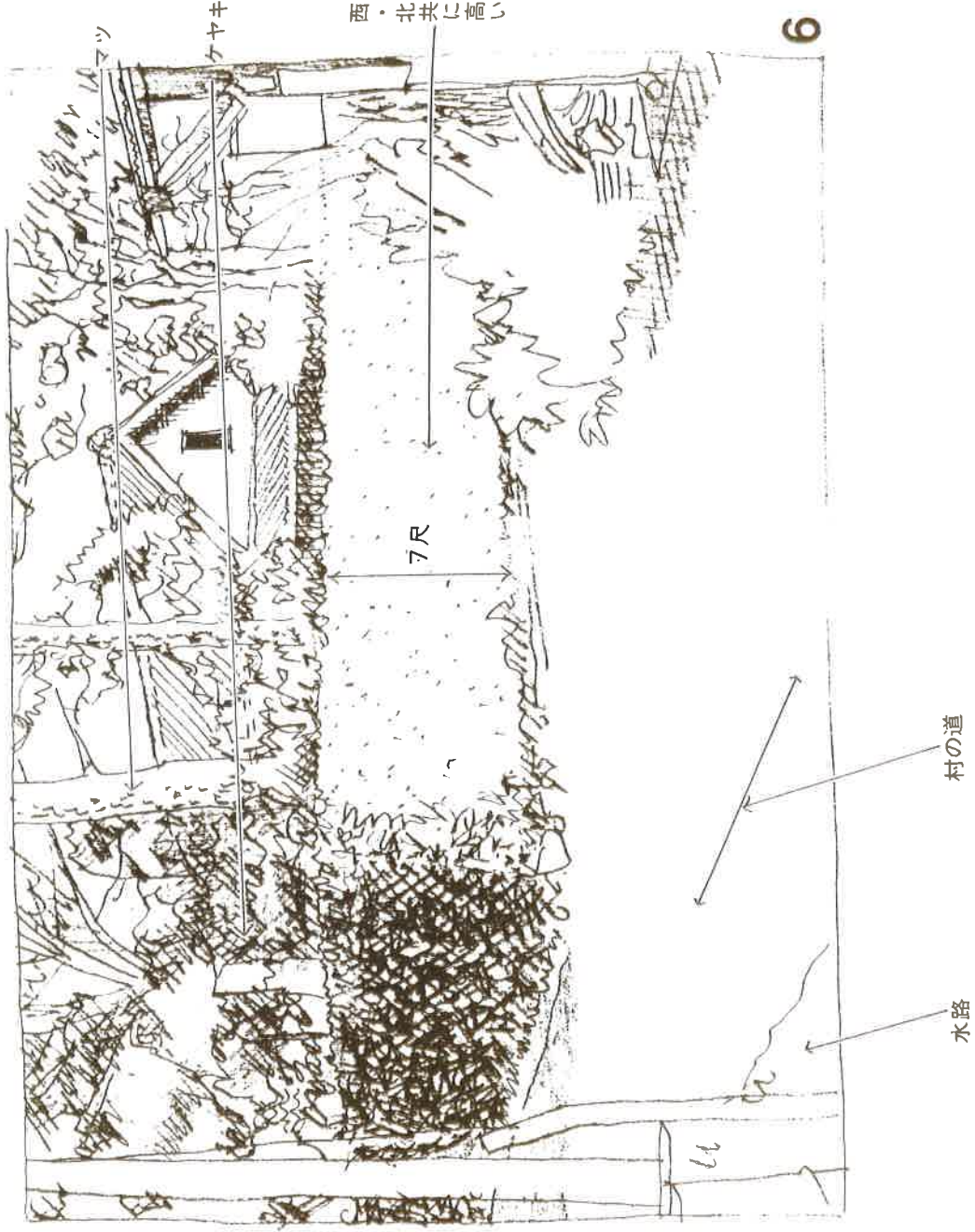
水路

北面のマキ
(6尺位)

村の道

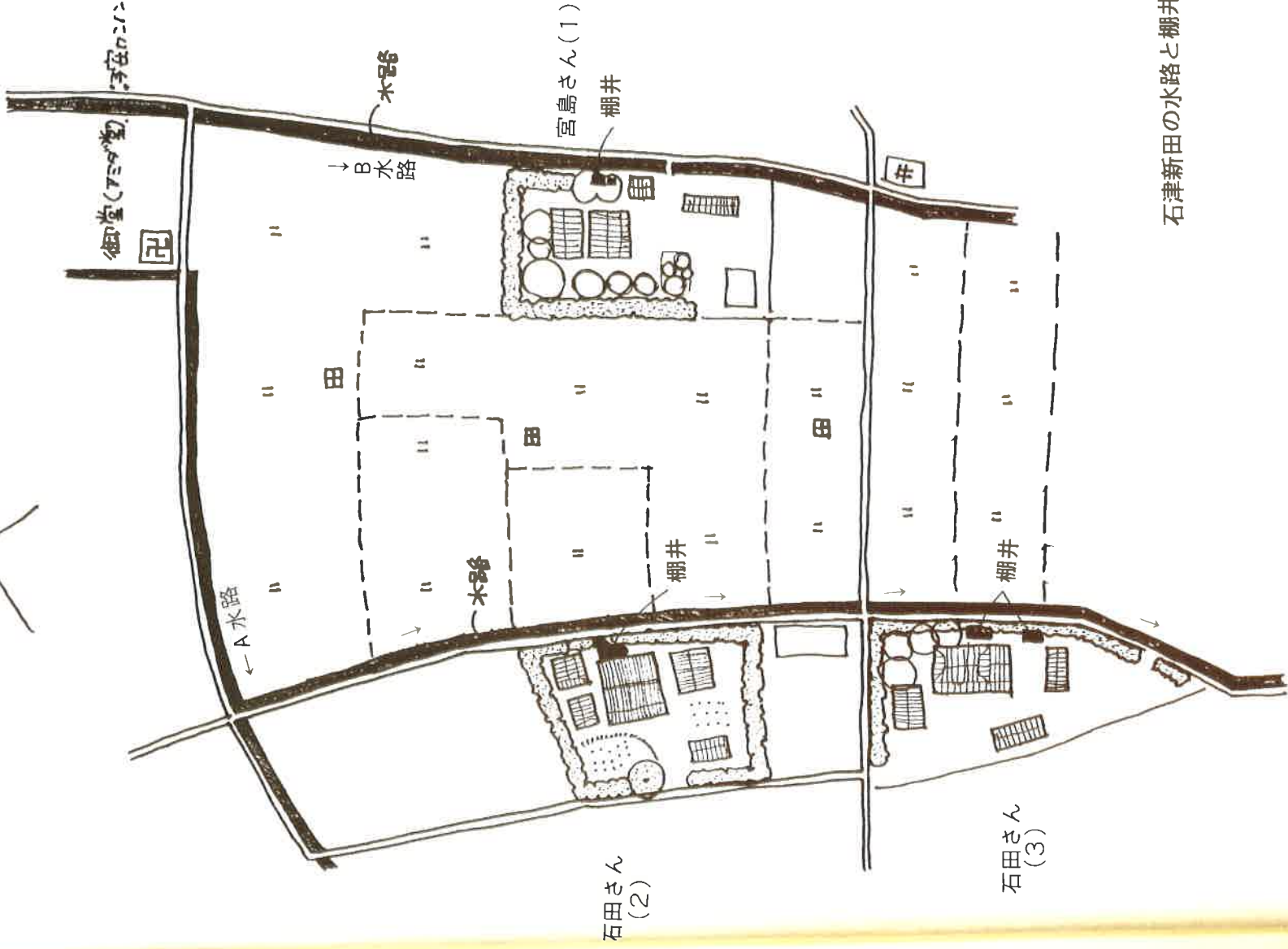
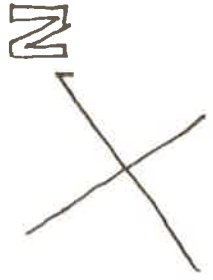
マキ(西の高い垣根)
9尺近くある

5



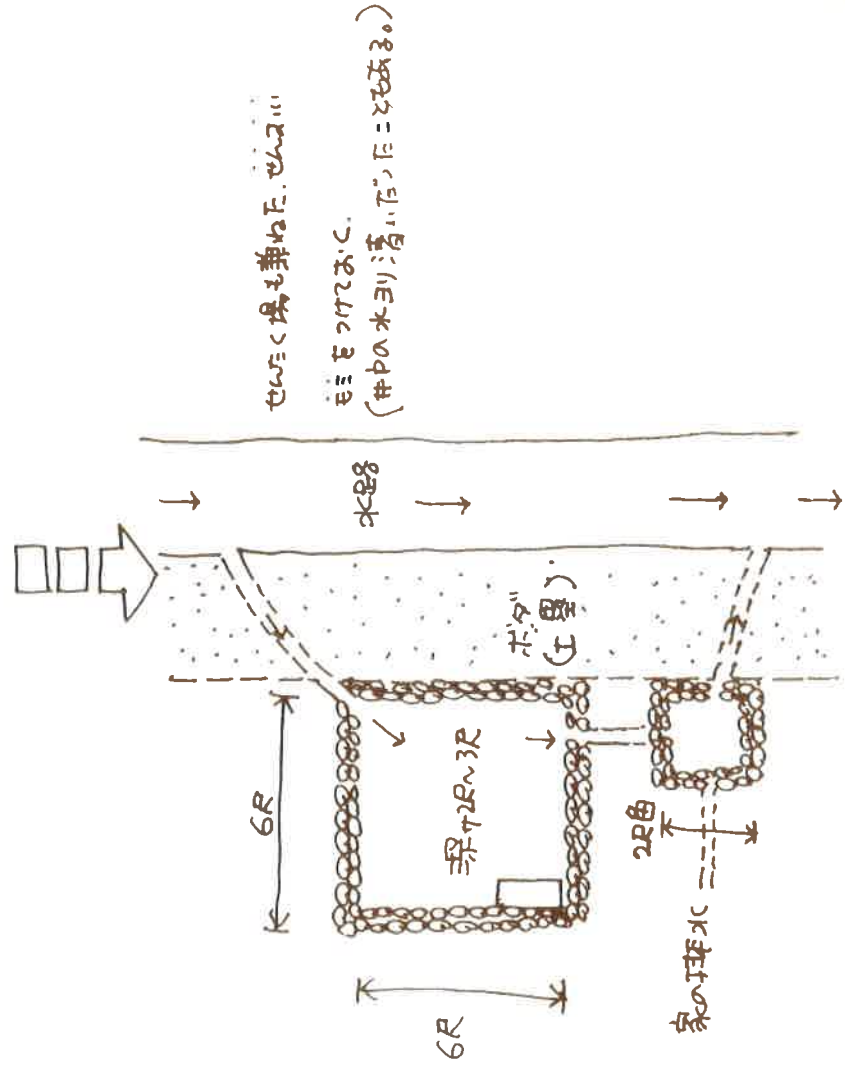
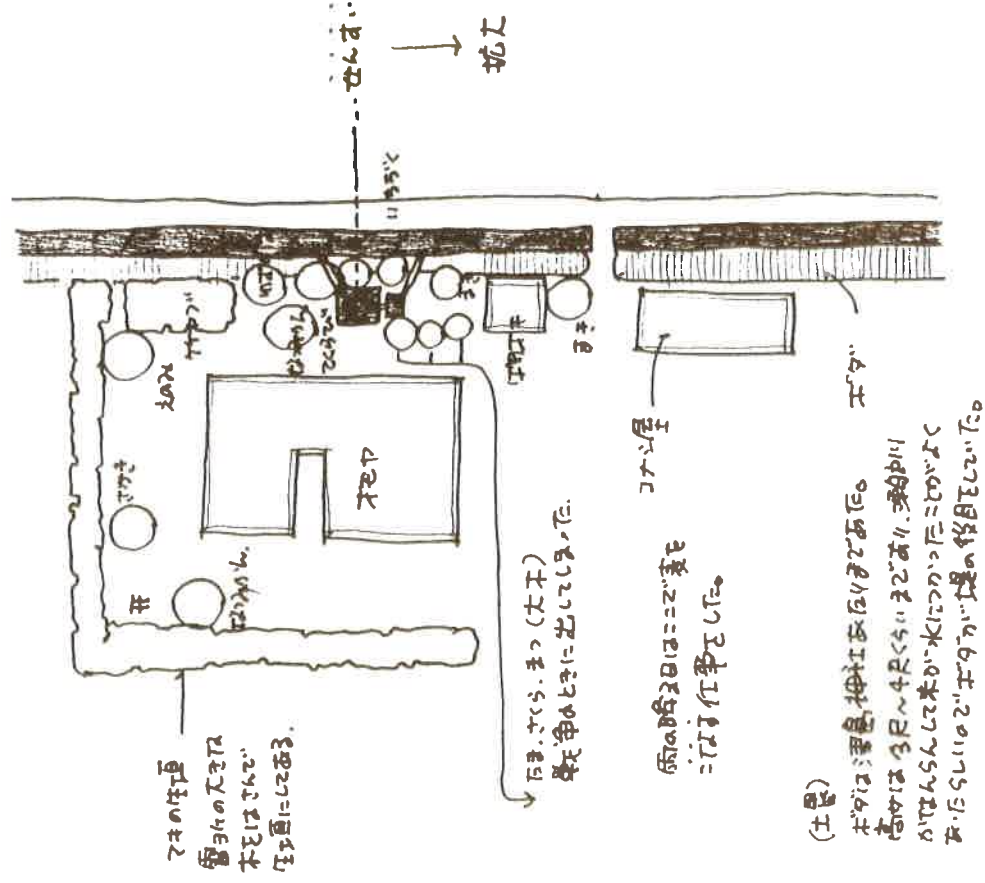
石田家の北西角

松の落ち葉は焚きつけに使った

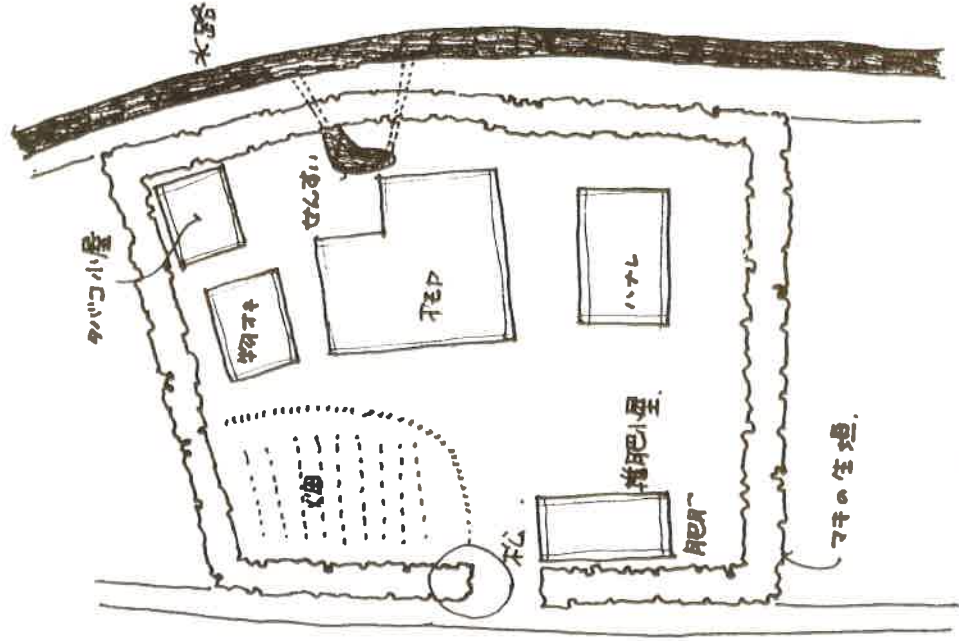


石津新田の水路と棚井

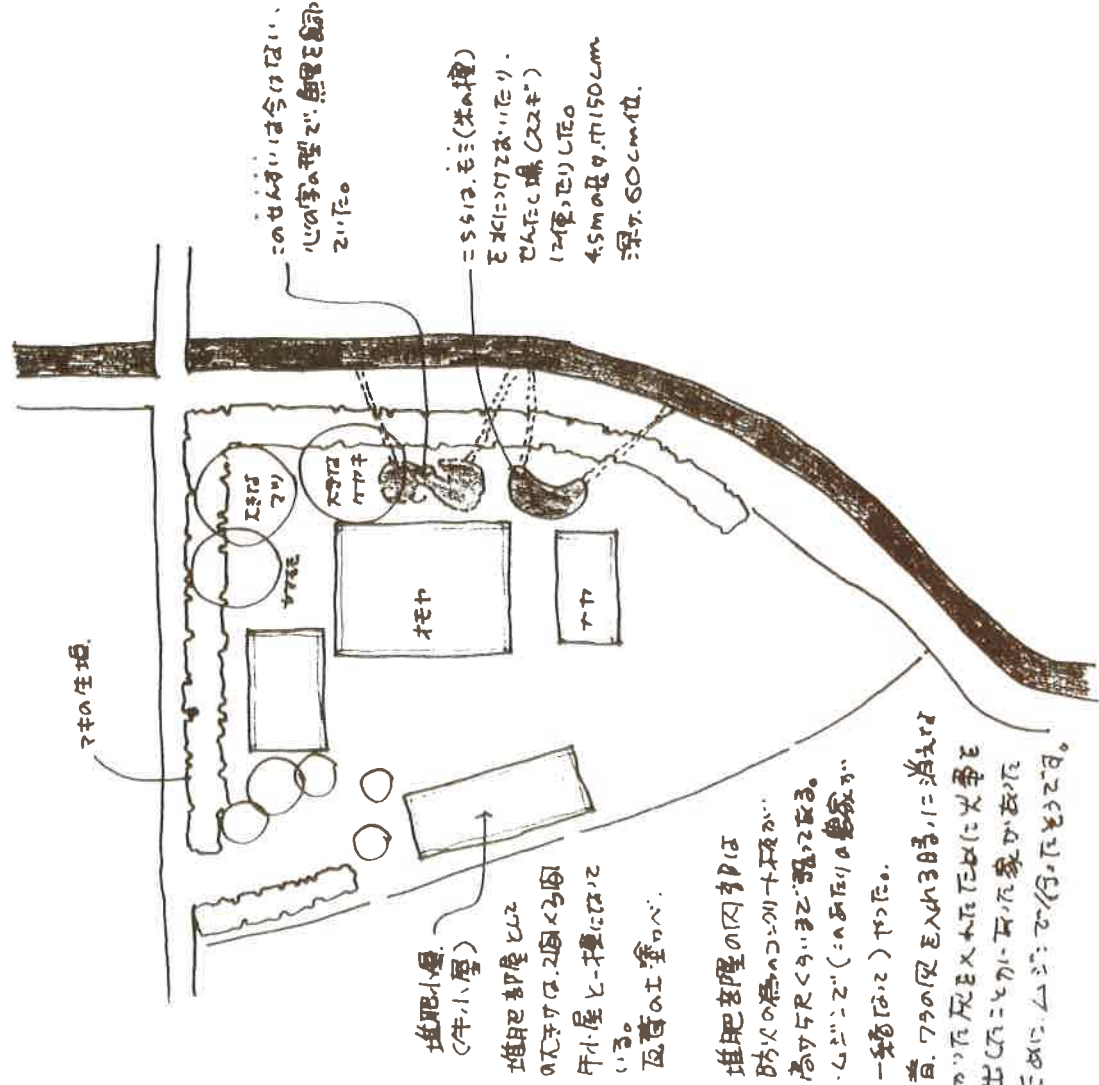
(1) 宮島さん宅

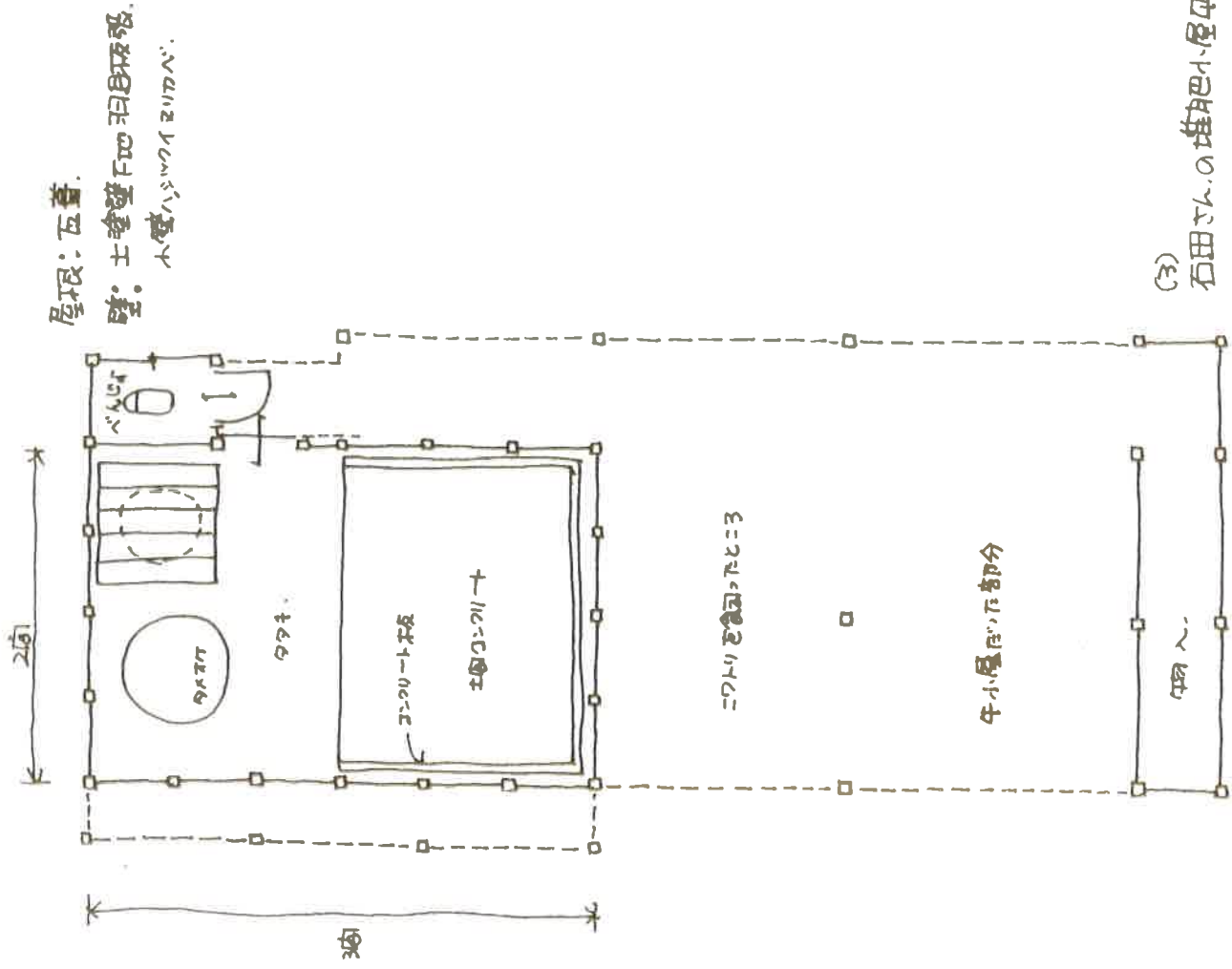


(2) 石田さん宅



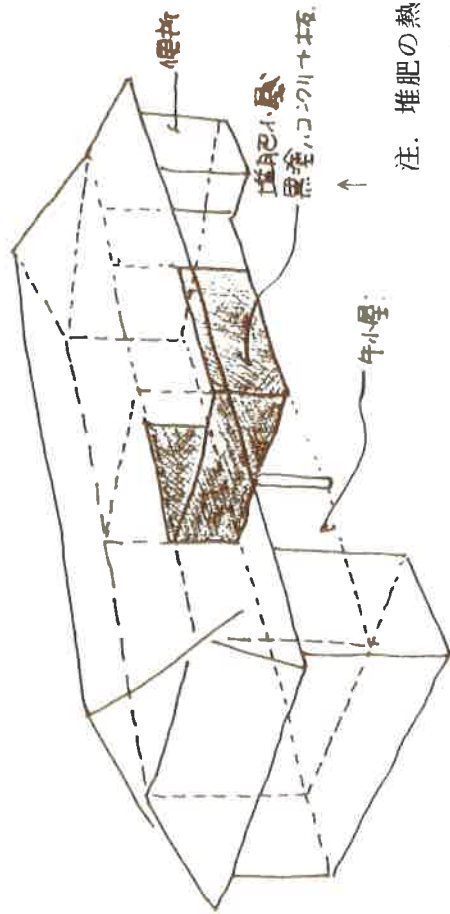
(3) 石田さん宅





(3) 石田さんの堆肥小屋断面

動物と人の排泄物は農業に欠くことのできない大切なものであった。排泄物は、肥料として加工して田畑に入れられたのである。堆肥小屋は動物の飼育小屋であり、人の便所であり、肥料の生産小屋であった。



注. 堆肥の熱で発火することがあるため
 コンクリートで囲う。

二 大井川平野のボタ

大井川、瀬戸川、黒石川、木屋川、栃山川などの大小河川がその河口を開く大井川平野は、扇状デルタ地帯として地質学的に分類される。

本調査地域である焼津南部地区は、この大井川平野の南東に位置し、黒石川と木屋川にはさまれる地域である。また、海岸線には小川港があり、汐が石津新田の東側まで入る汽水域にある湿田地帯であった。そこには、大小の川と水路が蛇行し、その中に水田、畑、農家の屋敷森が点在していた。

そうした中にボタとよばれる土地がある。「ボタで水を防ぐ」「ボタの木を伐って来る」「ボタの木に触るな」「ボタの茶畑」「ボタの墓」等、調査の中で『ボタ』とすることばが度々登場した。ボタは屋敷の周辺にもあり、田の中、畑の中、川のそばにもある。そして、このボタは居住区として、あるいは生産の場として、また信仰の場、災害を防ぐ場として語られている。

そこで、この地域におけるボタとは何か、ボタがどのように成立しどのような役割を果たしてきたか明らかにする事は、この地域の地形的な特色及びそれにかかわる人々の生活の仕方を知る事になると考えられた。

1 ボタの分類

ボタをその利用目的別に大きく四つの類型に分類する。

I. 防災 II. 生業 III. 埋葬 IV. 信仰

四つの類型の中でもそのボタのある位置によっても次のように細かく分類すること

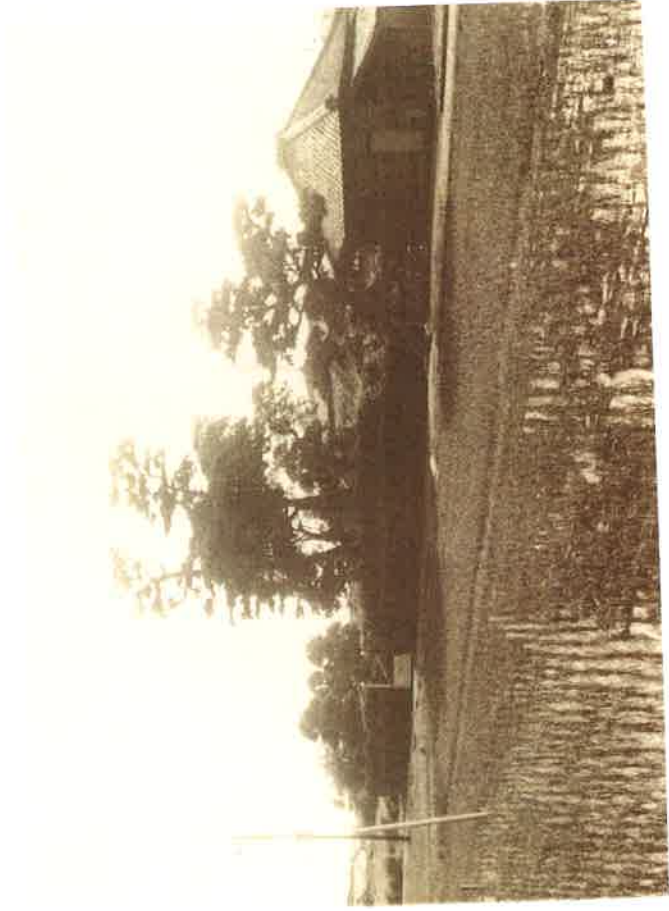
ボタの分類

場所	類型		1	2	3	4
	防	災				
A	川の近く	堤防	琴平さん	ヤシヤ・桑・松などの木	一族の墓地	白蛇さん 川中島八兵衛 水神さん 琴平さん
B	海の近く	堤防				波避け地蔵
C	水田の中	(琴平さん)		竹藪 茶畑 桑畑 松・桃の木 など	屋敷墓 七つボタ → おはつボタ → 方眼さん → 丹波の助太郎 → 六新さん → 五輪さん → 大覚さん → 猫塚	(琴平さん) →首塚稲荷 →おはつボタ →方眼さん →丹波の助太郎 →六新さん →五輪さん →大覚さん
D	屋敷隣接地	土塁			屋敷墓	
E	街道				六部塚	→六部塚 一本杉
F	村境				ヒヤ地蔵	



おはつボタ 中新田

田の中にあるおはつボタは、タマの木が梢を繁らせている。



石津新田の観音堂

石津新田の草分け「吉田（助左衛門）さん」の屋敷と隣接する。

栃山川の堤防と墓地を兼ねたボタ



が可能である。

- A. 川に近い B. 海に近い C. 水田の中 D. 屋敷隣接地
E. 街道筋 F. 村境

本焼津南部地区の調査で知り得た範囲のボタを前述〔利用目的別・位置別〕の観点で分類したのが右頁の表である。

① 防災型のボタについて

川の堤防のことをボタの名で呼ぶことがある。石津新田を流れる「前の川」の土手にはヤシヤの木が並んで植わっているが、以前は田の畦や川の土手（ボタ）のいろいろな所にヤシヤの木が見られた。この辺りは木の少ない平野部であったため、枝を伐ってもすぐに生えてくるヤシヤの木は、薪の供給源としてたいへん重要な木であるとともに、よく根の張る木なので畦道や土手がくずれのを防ぐ役割を果たしていた。洪水を防ぐ目的でボタには積極的に植えられていたわけである。

本中根の栃山川から二十メートル位離れた所（百五十メートルの長さ）に、川に沿うような形で細長いボタが残っている。屋敷墓にもなっているようだが、役割から考えると水避けのボタ（第二堤防の役割）の名残と思われる。

小川の琴平神社の辺りは昔は向川原と言っていた。現在では少し離れた北東を流れている黒石川が、昔はこの神社の南側を流れていたというから、この名の由来もわかる。前川佐一さん（明治三十九年生まれ）の話によると「昔この辺りは河原石がごろごろしていたもんで、田んぼを作る時にゃあ出てきた石や砂利をみんな一つところに集

めて捨てたもんだ」そうで、どうやら琴平さんも捨てられた石でできた、元はボタだったと考えられる。ここはこんもり高くなったところに木を植えてあって、神さんを呼ぶのにふさわしい場所なので、いつの頃から讃岐の国から勧請したという事である。以前は東海道線より南で一番高い所だったので、汽車に乗るとよく見えたそうで、この辺りの人々は以前から津波が来たら琴平さんに逃げれば良いと言っていたそうだ。だから、このボタは防災型の中でもAとCに属すと同時に信仰型ともいえる。

石津新田の宮島ふささん（明治四十一年生まれ）のお宅では、大水が出て困るのでこしらえたと言うボタの一部が屋敷の裏に残っている。土や小砂利をつみあげた高さのある土塁であるが、以前は屋敷の東面、北面、西面をぐるっととり囲んでいたそうだ。地理的に海も近く、このボタは川の氾濫だけでなく津波も十分意識してつくられている。

以前は屋敷を囲むボタがよく見られたが、土地改良されてからは消え、屋敷の周りに垣根の一部としてその名残を留めるのみとなった。現代の屋敷周りの垣根はこの土や砂利を意図的に積み上げた高さのあるボタとはその作り方と役割ということから考えて全く別のものである。

戦時中に土を積み上げて作ったボタは防空壕を作る場所に利用された。

防災型は水害を防ぐというその機能上、大きさや形、高さが意図的である。

② 生業型のボタについて

「ボタにブナ（ヤシヤの木）林があって、たきぎをとったもんだ。」そうである。防災型でもふれるが、ヤシヤの植えられたボタの林は薪の供給源であった。したがっ



茶畑のボタ

茶畑のボタ

て薪がたくさんある家は、土地（畑）がたくさんある家ということになり、娘を嫁にやるときに相手の家に積んである薪をまず見て、所有財産の多少を測ったので、縁談のあった男の家では隣近所から薪を借りてきて積んでおいたという笑い話のようなことがあったそうである。

電気やガスを燃料に使うようになってから、さすがにヤシヤの木の林は見なくなつたが、水田の中にそこだけとり残され島のようになっているボタをよく見かける。そういうところは今は松や樫、竹などの木がぼさぼさと生えているか、茶畑となつていくことが多い。この茶畑は「ボタの茶畑」と呼んだりする。この種のボタはボタの成立と、ボタが単なる石捨て場から生活を支える生産の場になっていった過程を考える上でヒントになると思う。

この辺りは、地質学的には大小河川によってできた扇状デルタ地帯で、そのために水害の影響を受けやすく、湿地も多かった。先ず最初、水の影響を受けにくい微高地に住みついた開拓者たちにとって、水田を作るにあたって湿地での耕作は大小の河原石の混じる土質をいかに生産に適するものにするかが開拓のカギとなったと考えられる。この辺りの村はその沿革をみると十五、十七世紀に始まっている。中根の場合をみると、本中根からの分村が一六〇六年で、一六〇五年の大水害で向谷から和田まで芝地川原と化した大惨害のあとだったという（大富村史）。大石はもちろんのこと、大砂利小砂利を除く一からの開拓であった事が想像される。

まず屋敷を建てたのは微高地だったであろう。そうした微高地は川によって運搬された土砂によってできる。石津新田の家々は今でも川や水路に沿った形で配置されていて、先人たちがどういった場所を選んで住みついていたか読み取れる数少ない所であろう。

屋敷を構え、その周辺で生産を始めるときどうしても石捨て場が必要だった。それはどんな所に捨てられたのか。おそらく敷地の隅、隣の家との境、石や砂利が最初から集まっているような所、木が生えていて現在生産に敵さない所などが考えられる。

屋敷周りの水につかりにくい所の石は一つ所に集められて小山（ボタ）になりその周辺に畑地ができた。今でもこの辺りの畑には石が多く、耕作の様子を見ていると、出てきた石を実に何気ない動作でポイとボタや道路の脇に投げ上げている。ボタは最初、石捨て場だったからそこから生産しようとは考えられなかった。それは雑草や雑木がぼさぼさしているような所だったろう。それは今でも土や石が盛り上がっていないくても手入れのされていない藪のような所をボタと呼ぶことからわかる。ボタの木はやがて薪や杭に使われるなどして、積極的に活用されることになった。再生の早いヤシヤの木を植えたり、竹を取ったりと単なる石捨て場が生産の場に昇格していったのである。

田の中のボタも同様で湿田の中のボタも貴重な耕地として利用されるようになっていった。

大住の石田才一さん（大正二年生まれ）が伝え聞くところによると、松やブナ（ヤシヤの木）が植わったボタは、大正時代の初め頃、茶畑や自家用の畑に代わっていったそうである。茶畑の脇には大豆、かしき（空豆）、大根などの作り畑として無駄なく利用されている。この場合でも「ボタの茶畑」と言う呼び方をする。今見ると、普通の畑のように見える所もボタと呼ぶところをみると、石、土砂を積み上げこんもりとそこだけもりあがったボタと言う本来の形が消えても『ボタ』と言う名称は残ったものと思われる。

中根の六新さんを祀ってあるボタは、今は畑の中に耕されないまま残っていて五、六本の松の木と祠があるだけだが、伝説によると昔は松林と墓地だったという。（伝説の項参照）墓地をお寺に移した後、そこは一時茶畑になったそうである。その後どういうわけで再びボタになったのかわからないが、『ボタ』の名を残しながら生産の場として利用されていたことがわかる。

③ 埋葬型のボタについて

生産に適さないボタに墓地が作られるたは当然のことだった。

墓地は、家族のもしくは一族の墓地と、牛馬などの家畜や身元のわからない川流れや行き倒れの旅人の死体を葬った墓地とに分かれる。

家族・一族の墓地は、その多くが寺に移されたために本調査期間では詳細な事が判らなかつた。家族の墓地は、居住区の一部にあつたり（これもボタという）田畑の中のボタにあるのが普通だった。大井川平野ももう少し上流部西の大洲あたりにいくと川の流れに適応するような形の船型屋敷が見られる。船の舳先に当たる三角の先端が川の上流に向かって位置し、洪水の時にはその流れを二分し衝撃を回避するように形造られている。そして、その先端部に屋敷墓があり、ちよつど先祖の霊が子孫を守るように配されている。さらに西に行つた金谷町五和の集落や吉田町小山の集落の場合には、集落全体を守る堤防が大井川の流れを二分するようにつくられ、その先端に村の神社や墓地の聖地を置き、同様の意味が考えられる。

同じ大井川平野にある焼津南部地区の屋敷墓がどのような位置にありそれがどのような靈魂観によるものかは今のところ判らない。

防災型の項でふれた本中根の栃山川沿いのボタには、一族の墓地と思われるいくつかの墓石がある。あるいは前述の例のように、川の氾濫から村屋敷を守るといった意味合いがあつたかもしれない。ひき続き調査をすすめるつもりである。

牛馬や家畜を葬ったボタは村境にあつたようである。道原の一五〇号線の近くにあつたボタはそのためのものだったという。

埋葬型ボタの中でも所在や謂われが比較的はっきりしているのは、川流れや行き倒れの旅人の墓のあったボタである。身元の判らない死体を便宜上そこらのボタに葬ったのであろうが、その墓が後に人々の信仰を集めるようになり、手を付けてはならない場所とされたことや伝説として語り伝えられたことから残されたのである。表中の――→で書かれたものが埋葬型から信仰型に発展したボタである。これについては信仰型の項で詳しく考察したい。

④ 信仰型のボタについて

信仰型のボタで圧倒的に多いのが川流れや行き倒れの死体の墓のあったボタが信仰の対象になったものである。それまで気にも止められていなかった墓や石碑が、何かをきっかけに急に人々の信仰を集め参拝者が増え賑わうことがある。これを『はやり墓（はやり神）』と言うがここにあげるボタがそれである。他地域と比べて本調査区域に何故これほどたくさんあるのか、という点についてはあとでふれることとして、どんなふうに埋葬型から信仰型に移行し『はやり墓』になっていったのか具体的にみてみたい。

おはつボタ

田中の殿様の城下の「おはつ」というおばあさんが、どういうわけか中新田のタマの木が生えているボタに葬られた。タマの木の下に自然石が置かれ、オハツさんと呼ばれていた。粗末にするとバチがあたると言われていたが、明治の中頃、吉永の漁師がバチをあてるような所なら、反対に大切にすれば御利益もあるだろうと願をかけたところ、たいへんな大漁だった。この他、代理の人にお供え物を託したところ、頼まれた人が自分が食べてしまったら病気になるという噂があった。「中新田に申し事

に効くお墓があるってさ」という評判がたつと、きのうは三人、今日は五人と日増しに参詣者が増えていったそうだ。村の人々が驚いてタマの木の所に注連縄をはったり、掃除をしたり、賽銭箱を用意したりすると、そのうちにお供えに蟹があがりはじめた。昨日も今日もと蟹があがると、これはたいしたものだと大騒ぎになった。それからは参詣者が殺到し、村では賽銭や供え物の管理をする当番を決めたり、道を修理したり、そのうち名古屋のほうから轆を長持ち一杯寄付する人が現れて祭りのような騒ぎとなったそうだ。露店も出てそれは賑やかだったという。おはつボタは明治三十四年に盛大な供養のもとに今の場所に移された。タマの木はへたに触ると祟るので全員で恐る恐る植え代えたそうだ。

はげしい流行は一時的なものだった。しかし、今でも村のお年寄りには熱心に信仰され八月一日にはオショウヤを申し、だんごをつくって供養している。

中新田の岡野きょうさん（明治三十五年生まれ）の記憶では、おはつさんが祀られていたもとのボタは藪になっていて木がぼさぼさしていてとても怖かったと言う。

同じく中新田の村松ふきさん（明治三十九年生まれ）が聞いた記憶では、おはつさんは川流れで死んだのでかわいそうだと言って祀ったということだった。

六新さん

川流れで、中根の田んぼの中のボタに引っ掛かっていたのを、墓地であったそのボタに埋葬した。賭け事の好きな男が、自分の飼っている牛がメスを生むようになってくれたら祠をたてて祀ってやる、と言ってその塚に参ると、望みが叶ってメス牛が生まれた。祠をたてると、申し事に効くと言ってお参りする人が現れた。特に勝負ごとと病気に効くという評判だった。

ここでも、昭和十五年頃までは、焼津の漁師が蟹をあげたりしたそうである。三右衛門新田の松下えつさん（明治三十五年生まれ）は子どもの頃、歯が痛い時、おばあさんに連れられて六新さんをお参りしたそうである。

今はボタの地主の増田まさおさんのお宅で、年一回おせがきにおっさんにお経をあ



昭和30年頃の三右衛門新田 中央の川は黒石川

石津新田の五輪さんは、婦人病によく効くとして信仰された



げてもらい、自分の家で子どもにお菓子や団子を配っているそうである。

丹波の助太郎

中新田の田の中のボタに川流れの死体を埋葬した。ボタの木を触ると必ずバチがあたりといわれていねいに祀っていた。

大覚さん

なぜ祀られるようになったか判らないが、大住の榎の植わったボタに自然石が置かれていた。歯痛に効くと言われ、炒った豆を供え「この豆の芽が出るまで歯が痛まないように」とたのんだそう。昭和二十八年頃の耕地整理でほかに移されたそうだがどこに行ったか不明。

五輪さん

石津新田の中にあつたボタに祀られていた。病気で死んだ旅の女の墓で、小さい石の五輪塔が置かれていた。婦人病に効くといつて女の人がお参りにきた。

石津の宮島ふささん（明治四十一年生まれ）が畑で麦を蒔いていると、五輪さんによくおはたしの赤い糸をかけ、焼きまんじゅうを供える人の姿を見たという。

方眼さん

大島新田のネブリの木の下ボタに病死した六部の墓があつた。申し事に効くとして近くの年寄りがよく願をかけた。おはたしには御神酒をあげたそう。

六部塚

一七五六年、中根新田の新田街道の赤松の木が植わったボタに旅で死んだ六部を祀った。命日の七月七日にお年寄りが団子や茶菓子をお供え御詠歌を唱えて供養をしたところ、いつしか「六部さんは申しごに効く」と評判になった。お参りする人

七つボタは、今は首塚稲荷として祀られるようになった 北道原



が増え、特に命日には何百人となり露店商人が何人も来たと言う。

七つボタ（首塚稲荷）

一五七〇年武田信玄が花沢城を攻めた戦で、北道原の辺りには討ち死にした人の死体が至るところにあった。土地の人たちはそれを集めて七つのボタに埋め七つボタとか七つ森と呼んだ。このボタに度々妖怪が出て困るので、集めて社を建てて霊を祀ったという。これが首塚稲荷である。いつ頃の事ははっきりしないが再建は一八五五年である。

北道原の増田なみさん（明治四十三年生まれ）は、昭和二十年代まで七つボタの跡だといわれたいくつかのボタが手をつけられないまま田んぼの中に草ぼうぼうとなつて残っていたことを記憶している。

（その他の信仰型のボタ）

特徴的なのは白蛇さんや水神さんである。これらは大正、昭和と比較的新しい時代に祀られるようになったものであるが、いずれもかつて黒石川の大きな淵があった場所である。淵の主がでて災いをおこすというので個人の家で祀りはじめた。白蛇さんは一時、焼津の漁師にも信仰されて鱈の捧げ物があったという。やはり墓の小型だったようだ。

水神さんは今でも近所の人や近くに土地を持つ人に信仰され、年一回供養が行われている。今は淵もなくなって、住宅の横の畑の中のボタにひっそりと祀られている。

2 ボタとはやり墓・はやり神

① 信仰型ボタからはやり墓・はやり神へ

信仰型のボタは次のような段階を経てはやり墓になっている。

川流れ・旅人の死・廻国の修行者の死・戦死

←

村人たちがボタに埋葬する

←

ボタの木は触ったり折ったりすると祟りがあると恐れられる

←

頼み事をする

←

効きめがある

←

はやり墓・はやり神となる

川流れ、旅の途中の死、戦死いずれもこの世に思いを残して亡くなった者たちである。日本には古くからそういうまっとうな死を迎えなかった人の霊が災いをもたらすといった宗教意識が強くあった。これは祖霊信仰とは別の信仰形態で、怨霊・御霊系の信仰であった。それ故に私たちの祖先は非業の死をむかえざるをえなかった者の霊の怨念を恐れ、それを鎮めるために心を込めて葬ったのである。一方で、神が姿を

変えて村を訪れるという日本古来のマレビト信仰の考え方があって、旅人や六部のような廻国の修行者はかなり丁重に扱われたようである。そういう者たちが旅の途中、自分の村で病に倒れば、食事を運んだりして心を尽くして看病した。そして、その甲斐もなく亡くなった時には手厚く葬ったのである。

死者はボタに葬られた。田畑のそこそこに点在するボタの中で、どういうボタが選ばれたのかは今となっては判らないが、おはつボタ（タマの木）、六新さん（松）、大覚さん（榎）、方眼さん（ネンブリの木）、丹波の助太郎（？の木）というように、それらのボタには必ず目印の木があった。木の下に葬られたのか、あるいは葬られてから木が植えられたのかは定かではない。しかし、その木には死者の霊の鎮魂と再生を願う心が汲み取れる。したがって、霊の再生につながる木は、木そのものに強力な霊が宿っていると考えられ、葉一枚にまでも霊力が乗り移っているとされた。ボタの木は触れたり折ったりすると祟ると恐れられたのである。だから、その木が植えられたボタは、霊の力のみなぎる場所として考えられた。ボタの威力の拡大である。

ある時、ボタがはやり墓に代わるきっかけが訪れる。祟ってバチを当てるような所なら、反対にその力できつと願いを叶えてくれるだろうと願を掛ける者が現れたのである。その願の内容をみると大変おもしろい。おはつボタの場合は漁師が大漁を祈願し、六新さんはメス牛が生まれることを祈願するのである。これはじつに生活に密着した願いであり、「威力のあるものになら何にでも祈願してしまおう」という庶民の現世利益を願う積極性（図太さ）が感じられる。

ところが、たいしたものでボタの埋葬者はそんな願いもちゃんと聞いてくれたのである。そして「〇〇のボタの〇〇さんは申し事に効く」と霊験の範囲が、さらに拡大されて伝わっていった。特に、本地域では漁師たちが鰹の捧げ物をしたことが印象的に語られるが、これはもともと漁師に「流れ仏」に対する信仰があったことと関係すると思われる。漁師の間では、海に出て水死者に出会うことは「流れ仏」に出会う事として吉兆と考えられ、そうした場合は必ず拾い上げた。そうする事によって漁運がつくと考えられていたのである。漁師には川流れ（流れ仏）がひっかかっていたとい

うボタには、特別の靈驗が感じられたのであろう。

靈驗を求めて人々が押し寄せる。おはつボタや六部塚は、一度に何人という参詣者があつたと伝えられる。幟が立ったり露店が出たり、それはまるでお祭りの様だったらしい。病氣治癒、歯痛止、賭け事、子授け、大漁祈願等人々はそれぞれの思いで参詣する。ボタのある村では村をあげて、念仏を申したり団子を作ったりして墓の世話をした。弁当を背に、人と連れ立っての参詣は一つの娯楽にもなった。爆発的な流行になってからは、素朴ながらも切実な祈願というよりも、遊山といった感覚でのお参りにもなっていたのではないだろうか。

一般に「はやり神」は次のように定義づけられている。

【はやり神】

突発的に流行し出し、一時期に熱狂的な信仰を集め、その後急速に信仰を消滅させてしまう神や仏。

特性

- (1) 信仰対象の神仏が雑多である。
- (2) 信仰に永続性がなく、きわめて流動的である。
- (3) 靈驗が個別的・機能的に説かれる。
- (4) その伝播は地域的に制約される。

(日本民俗辞典より)

焼津南部地区の流行もその例にもれず、祭りのような熱狂的な騒ぎはいつしか消え、他村からの参詣人もなくなった。「はやる」ものはいつかは「すたれる」運命にあるのだ。もともと願掛けは、神と自分との契約関係であるが、あまりにも多くの人々が押し寄せ、それぞれに願を掛けるとあつては、個人個人の契約関係が薄れありがたみが感じられなくなってくるものである。立派な神社や仏閣と違い、外見からして地味な

ボタの神様は飽きられてしまったのかもしれない。

だが、爆発的な人気の去った後も村内ではひっそりと、しかし確かに信仰は続いていた。村の念仏講の年寄りたち、或いは青年たちによって供養されていたのである。六部塚の例を上げると、ある病氣の人が見てもらったところ、六部さんは若い者を好くと言う事だった。そこで青年たちが墓の供養をおこなうようになったというのである。六部さんの墓石は方石となって、青年のかつぎこの対象になったりしたという。本中根の成岡卓郎さん（大正二年生まれ）は、父親から「六部さんの石をかついで放れたのは自分くらいのもんだった」と聞いている。青年に親しまれた六部塚だった。

ボタの埋葬者は一個人に祀られるのではなく、ムラ全体で祀られることによってムラ全体を守ってくれるものとして考えられたのである。

② なぜ信仰型のボタがこの地域に多いのか

その地形的な特色とボタの形状に依るところが大きい。平野部において、微耕地であるボタは目ずと目立つ存在であった。これが他の山がちの所であったなら、特別な場所という意識は生まれなかったであろう。ボタが平地の中で、特に際立った存在であったればこそ、そこに神秘性を感じ、信仰が寄せられたのである。

旅人や修行者の墓が多いという事は、そういう者たちがこの辺りに大勢やって来たということであろう。海に近く気候が温暖で人が行き来し易い風土であったこと。また、釈迦堂の弥吉の伝説（伝説の項参照）からうかがえるように、廻国の修行者を温かく迎える村人がいて、その中でひたむきに修行を続ける行者を支える土地柄があったと思われる。

大井川、瀬戸川、黒石川、木屋川の下流域にあって、しかも海に面しているこの地域は、常に洪水や津波の危険に身をさらされていた。水との戦いは深刻であった。いろんな知恵で生活を守ってきたものの、人間の力は自然のそれと比べてはるかに小さく力の及ばない事が多かった。そんな中でできたことは、ひたすら神仏にすがり祈ることだった。

それがこの地域の人々をひじょうに信心深くした。そうした心情が根底にあって、旅人の埋葬地、ボタは作られ祀られたのである。

この地域の人々の信仰心がうかがえる事として、現代版はやり神を紹介したい。三右衛門新田の街道筋のお堂があって、中に弘法様が祀られている。もとは別の場所の集会所の所にあっただが、そこが建て替えになった時ここに移された。今、この弘法様のお世話をしている松下えつさんは、明治三十五年生まれで今年九十才になる。畑仕事をし、午前中は焼津の方まで野菜を売りに行き、午後はゲートボールをやるというお元気さで、たいへん記憶力もよく健康そのものといった方である。弘法様のお堂のお掃除と花の水替えを欠かさないえつさんが、たいそうお元気なのを見て、弘法様の御利益にあやかりたいとお参りする人が何人も現れたそうである。近頃ではお賽銭でおせがきの費用がでる程になったということである。信心深いえつさんと、それにあやかりたいと信心を始める人々は、この地域の先祖たちの心を確かに受け継いでいるように思う。

3 ボタに寄せられた思いを後世へ

土地改良が行われ、治水整備がなされる様になって、ボタは急激に姿を消した。洪水や津波（東海沖地震は心配されるが）への恐怖は過去のものとなった。先人たちが水害から家屋敷、生活を守るために積んだ川沿い海沿いのボタと言う土塁は、科学的

に計算された堤防に代わった。田畑の中にあつたボタも新しい家ができる時の基礎に使われたりして取り壊されていった。屋敷墓は寺に移され、かつてははやり神として多くの人に持て囃された、謂われのあるボタも、今はその所在地を探すのも大変なことである。

しかし、おはつボタのおはつさんのようにボタを離れて今尚、信仰されているものもあつた。因みに、今はゲートボールに勝つようにとか、孫が試験に合格するようになどの願掛けがなされ、おはつさんも休む暇はなさそうである。御詠歌をうたい、念仏を申すお年寄りから「おはつさんは本当によく効くだよ」のことばを聞いて心にほっとするものがあつた。おはつさんは今、トウロンバといわれた広場で、いっしょに移し換えられたタマの木の下で静かに村人たちを見守っている。

ボタを考えると、先人たちの水との戦い、水への恐れ、死者への思い、神仏への敬虔な気持ち、効き目が有りそうなものにはどんどん御利益を願ってしまう逞しさを知る事ができる。私たちはボタの消滅とともにそうした記憶まで無くしてはならない。地面が平らにならされ、歴史風俗が消滅するのはまことに寂しい。今、本地域は土地改良のまっただなかであるが、私たちの先人のボタに寄せた思いが、いつまでも後世に伝えられるような配慮がほしいと思う。